

坊っちゃん

夏目漱石



親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもない

と云つた。切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合つた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲こうをはすに切り込んだ。幸さいわいナイフが小さいのと、親指の骨が堅かたかつたので、今だに親指は手に付きいている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽つくすと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中まんなかに栗くりの木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸せどを出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋やましろやという質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎かんたろうという十三四の倅せがれが居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣を乗りこえて、栗を盗ぬすみにくる。ある日の夕方折戸おりどの蔭かげに隠かくれて、とうとう勘太郎を捕つかまえてやつた。その時勘太郎は逃にげ路みちを失つて、一生懸命いっしょうけんめいに

飛びかかつてきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢はちの開いた頭を、こっちの胸へ宛あててぐいぐい押おした拍子ひょうしに、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷あわせの袖そでの中にはいった。邪魔じやまになつて手が使えぬから、無暗に手を振ふつたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡なびいた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足捌あしがらをかけて向うへ倒たおしてやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩くずして、自分の領分へ真逆まっさかさま様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫わびに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やつた。大工の兼公かねこうと肴屋さかなやの角かくをつれ

て、茂作もさくの人参にんじん畠ばたけをあらした事がある。人参の芽でそろが出揃とこわぬ処ところへ藁わらが一面に敷しいてあつたから、その上で三人が半日相撲すもうをとりつづけに取つたら、人参がみんな踏ふみつぶされてしまった。ふるかわ古川の持つもつている田圃たんぼの井戸いどを埋うめて尻しりを持ち込まれた事もある。太い孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧わき出て、そこいらの稲いねにみずがかかる仕掛しかけであつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ぼうちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿さし込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川が真赤まっかになつて怒鳴どなり込んで来た。たしか罰金ばっきんを出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛かわいがつてくれなかつた。母は兄ひいきばかり鼻眞おんながたにしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居しばいの真似まねをして女形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはど

うせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役ちやうえきに行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬあばらばね二三日にさんち前台区で宙返りをしてへつついの角で肋骨うを撲うつて大いに痛かった。母が大層おおこ怒おこつて、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類とまへ泊とまりに行っていた。するととうとう死んだと云う報知しらせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかったと思つて歸つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云った。口惜くやしかったから、兄の横つ面を張つて大變叱しかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮くらしていた。おやじ

は何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと言癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙な
おやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに
英語を勉強していた。元来女のような性分で、ずるいから、仲
がよくなかった。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をしていた。あ
る時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに
冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間
へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじ
に言付けた。おやじがおれを勘当すると言ひ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当され
るつもりでいたら、十年来召し使っている清という下女が、泣き
ながらおやじに詫まつて、ようやくおやじの怒りが解けた。それ
にもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえつ

てこの清と云う下女に気の毒であつた。この下女はもと由緒ゆいしよのあるものだつたそうだが、瓦解がかいのときに零落れいらくして、つい奉公ほうこうまでするようになったのだと聞いている。だから婆ばあさんである。この婆さんがどういふ因縁いんえんか、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想あいそをつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾つまはじきをする——このおれを無暗に珍重ちんちようしてくれた。おれは到底人とうていに好かれる性たちでないとあきらめていたから、他人から木の端はしのように取り扱あつかわれるのは何とも思わない、かえつてこの清のようちにちやほやしてくれるのを不審ふしんに考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真まつ直すぐでよいご気性だ」と賞ほめる事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかつた。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろう

と思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌いだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を眺めて^{なが}いる。自分の力でおれを製造して誇^{ほこ}つてゐるように見える。少々気味がわるかつた。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がつた。時々是小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廃^よせばいいのにと思つた。気の毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣^{こづか}いで金鍰^{きんづば}や紅梅焼^{こうばいやき}を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉^{そばこ}を仕入れておいて、いつの間にか寝^ねている枕元^{まくらもと}へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼饅頭^{なべやきうどん}さえ買つてくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋^{くつたび}ももらつた。鉛筆^{えんぴつ}も貰つた、帳面も貰つた。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云つた

訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしよう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大變嬉しかった。その三円を蝦蟇口がまぐちへ入れて、懷ふところへ入れたなり便所へ行つたら、すぼりと後架こうかの中へ落おとしてしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捜さがして来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端いどばたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口ひもの紐ひもを引き懸かけたのを水で洗つていた。それから口をあけて壺いちえんさつ円札いんさつを改めたら茶色になつて模様が消えかかつていた。清は火鉢で乾かわかして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭くさいやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換かえて来て上げますからと、どこでどう胡魔化ごまかしたか札の代りに

銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣^やらないのかと清に聞く事がある。すると清は澄^{すま}したものでお兄様はお父様^{とうさま}が買つてお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固^{がんこ}だけれども、そんな依怙^{えこひ}蟲^{いも}負^きはせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだらう。全く愛に溺^{おぼ}れていたに違^{ちが}ひない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりでは

ない。鼻負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢^あつては叶^{かな}わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了見^{りようけん}もなかった。しかし清がなるなると云うものだから、やつぱり何かに成れるんだらうと思つていた。今から考えると馬鹿^{ばか}馬鹿^{ばか}しい。ある時などは清にどんなものになるだらうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車^{てぐるま}へ乗つて、立派な玄関^{げんかん}のある家をこしらえるに相違^{そうい}ないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所^{いっしょ}になる

気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、麴町こうじまちですか麻布あざぶですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りならで並べていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建にほんだても全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくって、心が奇麗だと云ってまた賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮していた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思つていた。

ほかの小供も一概いちがいにこんなものだろうと思つていた。ただ清が何かにつけて、あなたはかわいそうお可哀想だ、不仕合ふしあわせだと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかった。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなつた。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何か会社の九州の支店に口があつて行ゆかなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家を売つて財産を片付けて任地しゅつたつへ出立すると云い出した。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介やっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたらところで、喧嘩けんかをするから、向うでも何とか云い出すに極きまつてゐる。なま

じい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覚悟かくごをした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多がらくたを二束三文にそくさんもんに売った。家屋敷いえやしきはある人の周旋しゅうせんである金満家に譲った。この方は大分金になつたようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町おがわまちへ下宿していた。清は十何年居たうちが人手に渡わたるのを大いに残念がつたが、自分のものでないから、仕様がなかつた。あなたがもう少し年をとつていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いていた。もう少し年をとつて相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆なんにさんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困つたのは清の行く先である。

兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっ付いて九州
くだ下りまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半
の安下宿に籠こもつて、それすらもいざとなれば直ちに引き払はらわね
ばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこ
かへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持つて、
奥おくさまをお貰いになるまでは、仕方がないから、甥おいの厄介にな
りましょうとようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の
書記でまず今日には差支さしつかえなく暮していたから、今までも清に
来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はし
ても年来住み馴なれた家うちの方がいいと云つて応じなかつた。しか
し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易ほうこうがえをして入らぬ気兼きがねを仕直すよ
り、甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。それにして
も早くうちを持ての、妻さいを貰えの、来て世話をするのと云う。

親身しんみの甥よりも他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本しやうばいにして商買しょうばいをするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意ずいに使うがいい、その代りあとは構わないと云った。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊たんぱくな処置が氣に入つたから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場ていしやばで分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたつて面倒めんどくさくつて旨うまく出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなかろう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつ

まり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来^{しょうらい}どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平^{まっぴら}ご免^{めん}だ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛^かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起^{おこ}つた失策だ。

三年間まあ人並^{ひとなみ}に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定^{かんじよう}する方が便利であつた。しかし

不思議なもので、三年立つたらとうとう卒業してしまった。自分でも可笑しいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。もつとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようとして席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟つたのである。引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた。しか

しこうなると四畳半も引き払わなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉^{かまくら}へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。

家を^{たた}畳んでからも清の所へは折々行つた。清の甥^おというのは存外結構な人である。おれが行く^ゆたびに、居^おりさえすれば、何くれと款待^{もて}なしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自慢^{じまん}を甥に聞かせた。今に学校を卒業すると麴町^{まがど}辺へ屋敷を買つて役所へ通うのだなどと吹聴^{ふいちよう}した事もある。独りで極^きめて一人^{ひとり}で喋舌^{しゃべ}るから、こっちは困^こまつて顔を赤くした。それも

一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従の^{しゅじゅう}ように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点^{がてん}したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三疊に風邪^{かぜ}を引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃんいつ家^{うち}をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思つてゐる。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣でゐる。おれは單簡に当分^{ようす}うちは持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子^{ようす}で、胡麻塩^{ごましお}の鬢^{びん}の乱れをしきりに撫^なでた。あまり氣の毒だから「行

く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰め
てやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買っ
て来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴が食
べたい」と云った。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方
角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞
かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の
方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随
分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中
小間物屋で買って来た齒磨はみがきと楊子ようじと手拭てぬぐいをズツクの革靴かばんに入れ
てくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。
車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、
車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも

知れません。随分ご機嫌きげんよう」と小さな声で云った。目に涙なみだが一杯いっぱいたまっている。おれは泣かなかつた。しかしもう少しで泣くところであつた。汽車がよつぽど動き出してから、もう大丈夫だいじょうぶだろうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やつぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。

二

ふうと云いつて汽船がとまると、舢はしけが岸を離はなれて、漕こぎ寄せて来た。船頭は真まつ裸ばだかに赤ふんどしをしめている。野蛮やばんな所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見つめていても眼めがくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森おおもりぐらいな漁

村だ。人を馬鹿ばかにしていらあ、こんな所に我慢がまんが出来るものかと思つたが仕方がない。威勢いせいよく一番に飛び込んだ。続つづいて五六人は乗つたろう。外に大きな箱はこを四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕もぎ戻もどして来た。陸おかへ着いた時も、いの一いの一番に飛び上がつて、いきなり、磯いそに立つていた鼻たれ小僧こぞうをつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云つた。氣の利かぬ田舎いなかものだ。猫ねこの額ぬかほどな町内の癖くせに、中学校のありかも知らぬ奴やつがあるものか。ところへ妙みょうな筒つつつぼうを着た男がきて、こつちへ来いと云うから、尾ついて行つたら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。やな女が声こゑを揃そろえてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中学校を教えろと云つたら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行かなくつちやいけないと聞いて、なお上がるのがいやに

なつた。おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革鞄かばんを二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符きっぷも訳なく買った。乗り込んでみるとマツチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならぬ。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である。それから車を傭やとつて、中学校へ来たら、もう放課後で誰も居だれない。宿直はちよつと用達ようたしに出たと小使こづかいが教えた。随分気楽ずいぶんな宿直がいるものだ。校長でも尋ねたずようかと思つたが、草臥くたびれたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋やましろやと云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋の勘太郎かんたろうの屋号と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の櫓子段はしごだんの下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞ふさがつておりますからと云いながら革鞆かわとうを抛ほうり出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗あせをかいて我慢がまんしていた。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がった。帰りがけに覗のぞいてみると涼すずしそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘うそをつきやあがつた。それから下女が膳ぜんを持って来た。部屋は熱あつかつたが、飯は下宿のよりも大分うま旨うまかつた。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来たと答えた。すると東京はよい所でございましょうと云つたから当り前あただと答えてやつた。膳を下げた下女が台所へいつた時分、大きな笑い声が聞きえた。くだらないから、すぐ寝ねたが、なかなか寝られない。熱いばかりで

はない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやかましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしゃむしゃ食っている。笹は毒だからよしたらよかろうと云うと、いえこの笹がお菓でございまして云って旨そうに食っている。おれがあきれ返って大きな口を開いてハハハと笑ったら眼が覺めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突き抜けたような天気だ。

道中をしたら茶代をやるものだと思っていた。茶代をやらな
いと粗末に取り扱われると聞いていた。こんな、狭くて暗い部
屋へ押し込めるのも茶代をやらないせいだろう。見すばらしい
服装をして、ズツクの革靴と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだ
ろう。田舎者の癖に人を見括ったな。一番茶代をやつて驚かし
てやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐に入れ

て東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやったってこれからは月給を貰うんだから構わない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極まっている。どうするか見ろと済して顔を洗って、部屋へ帰って待つてると、夕べの下女が膳を持って来た。盆を持って給仕をしながら、やににやにや笑つて。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまいし。これでもこの下女の面よりよつぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つていたが、癩に障つたから、途中で五円札を一枚出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をしていた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかった。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概の見当は分つている。

四つ角を二三度曲がったらすぐ門の前へ出た。門から玄関げんかんまでは御影石みかげいしで敷しきつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通った時は、無暗むやみに仰山ぎやうさんな音がするので少し弱った。途中から小倉こくらの制服を着た生徒にたくさん逢あったが、みんなこの門をはいって行く。中にはおれより背が高くって強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか気味が悪わるくなつた。名刺めいしを出したら校長室へ通した。校長は薄髯うすひげのある、色の黒い、目の大きな狸たぬきのような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭うやうやしく大きな印の捺おさった、辞令しじを渡わたした。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込こんでしまった。校長は今に職員しよくいに紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒めんどうな事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付け

る方がました。

教員が控所^{ひかえじよ}へ揃^{そろ}うには一時間目の喇叭^{らっば}が鳴らなくてはならぬ。

大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々^{おいおい}ゆるりと話すつもりだが、まず大体の事を呑^のみ込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような無鉄砲^{むてつぱう}なものをつらまえて、生徒の模範^{もはん}になれの、一校の師表^{しひよう}と仰^{あお}がれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化^{およ}を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遙々^{はるばる}こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩^{けんか}の一つぐらひは誰でもするだろうと思つてたが、この様子じやめつたに口も聞けない、

散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇う前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘をつくのが嫌いだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断わつて帰つちまおうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布の中には九円なにがしかない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。しかし九円だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたのおつしやる通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つたら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知っているから心配しなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてゐるなら、始めから威嚇さなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴った。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたろうと云うから、校長に尾いて教員控所へはいった。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰こしをかけている。おれがはいったのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。大概は椅子いすを離れて腰をかめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭うやうやしく返却へんきやくした。まるで宮芝居の真似まねだ。十五人目に体操の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作しよさを十五返繰り返している。少しはひとの了見りようけんも察してみるのがいい。挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文

学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙みょうに女のような優しい声を出す人だった。もつとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣しやつを着ている。いくらか薄い地には相違そういなくつても暑いには極つてる。文学士だけにご苦労千万な服装なりをしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿ばかにしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた者だ。当人の説明では赤は身体からだに薬になるから、衛生のためにわざわざ誂あつらえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴はかまも赤にすればいい。それから英語の教師に古賀こがとか云う大変顔色の悪い男が居た。大概顔あおの蒼い人は瘡やせてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔むかし小学校へ行く時分、浅井あさいの民たみさんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つや

だった。浅井は百姓ひやくしやうだから、百姓になるとあんな顔になるかと

清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はいくらなりとうなすの

唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。

それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つたむく酬いだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてるにちが違いない。もつともうらなりとは何の事か今もって知らない。

清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかった。大方清

も知らないんだらう。それからおれと同じ数学の教師に堀田ほったと

いうのが居た。これは遅たぐましい毬栗坊主で、叡山えいざんの悪僧あくそうと云うべ

き面構つらがまえである。人が丁寧ていねいに辞令を見せたら見向きもせず、やあ

君が新任の人か、ちと遊びれいぎに来給きたまえアハハハと云った。何がア

ハハハだ。そんな礼儀れいぎを心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。

おれはこの時からこの坊主やまあらしに山嵐あだなという渾名をつけてやった。

漢学の先生はさすがに堅いものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始めで、大分ご励精で、——とのべつに弁じたのは愛嬌のあるお爺さんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、お国はどちらでებს、え？ 東京？ そりや嬉しい、お仲間が出来て……私もこれで江戸っ子ですと云った。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし制限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取つてもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、^{あさって}明後日から課業を始めてくれと云った。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くの

かおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿とまつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つたが、歸つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵營かぐらざかも見た。麻布あざふの聯隊れんたいより立派でない。大通りも見た。神楽坂を半分に狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下だなどと威張いばつてる人間は可哀想かわいそうなものだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくしたのだらう。歸つて飯でも食

おうと門口をはいつた。帳場に坐^{すわ}っていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴^{くつ}を脱^ぬいで上がると、お座敷^{ざしき}があきましましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳^{じゅうご}の表二階で大きな床^{とこ}の間^まがついている。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へはいった事はない。この後いつはいれるか分らないから、洋服を脱いで浴衣^{ゆかた}一枚になつて座敷の真中^{まんなか}へ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙をかいてやつた。おれは文章がまずい上に字を知らないから手紙を書くのが大嫌^{だいきら}いだ。またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船^{なんせん}して死にやしないかななどと思つちや困るから、奮発^{ふんぱつ}して長いを書いてやった。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿

屋へ茶代を五円やった。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまつたら、いい心持ちになつて眠氣ねむけがさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山嵐がはいつて来た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽ろうばいした。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は愚おろか、明日あした

から始めろと云ったつて驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕ぼくがいい下宿を周旋しゅうせんしてやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んでゐる。なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料しゆくりように払つても追つかないかもしれぬ。五円の茶代を奮発ふんぱつしてすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越こして落ち付く方が便利だから、そこのところはよろしく山嵐に頼たのむ事にした。すると山嵐はともかくもいつしよに來てみると云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家いえに至極閑静かんせいだ。主人は骨董こつとうを売買するいか銀と云う男で、女房にようぼうは亭主ていしゅよりも四つばかり年嵩としかさの女だ。中学校に居た時ウィツチと

云う言葉を習った事があるがこの女房はまさにウィッチに似ている。ウィッチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢った。学校で逢った時はやに横風おうふうな失敬な奴だと思つたが、こんなにいろいろ世話をしてくれるところを見ると、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつかちで肝癪かんしゃくもち持らしい。あとで聞いたたらこの男が一番生徒に人望があるのだそうだ。

三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいつて高い所へ乗った時は、何だか変だつた。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒はやかましい。時々図ず抜ぬけた大きな声で

先生と云う。先生には応えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯な人間ではない。臆病な男でもないが、惜しい事に胆力が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減った時に丸の内で午砲を聞いたような気がする。最初の一時間は何だかい加減にやつてしまった。しかし別段困った質問も掛けられずに済んだ。控所へ帰って来たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと単簡に返事をしたら山嵐は安心したらしかった。

二時間目に白墨を持って控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸っ子で華奢に小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がっても押しが利かない。喧嘩なら相撲取と

でもやつてみせるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並ならべて、ただ一枚まいの舌をたたいて恐縮きようしゆくさせる手際はない。しかしこんな田舎者いなかものに弱身を見せると癖くせになると思つたから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつた。最初のうちは、生徒も烟けむに捲まかれてぼんやりしていたから、それ見ろとますます得意になつて、べらんめい調を用いてたら、一番前の列の真中まんなかに居た、一番強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そら来たと思ひながら、何だと聞いたたら、「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣やつて、おくれんかな、もし」と云つた。お、くれんかな、もしは生温なまぬる言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸っ子だから君等きみらの言葉は使えない、分わからなければ、分るまで待つてゐるがいと答えてやつた。この調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。ただ帰りがけに

生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんな、もし、と出来そうもない幾何きかの問題を持つて逼せまつたには冷汗ひやあせを流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと嘸はやした。その中に出来ん出来んと云う声が聞えるきこ。篋べらぼう棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないと言ふのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ歸つて来た。今度はどうだとまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙みような顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで

見るほど楽じゃないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ
帰れない、三時までぼつ然^{ねん}として待つてなくてはならん。三時
になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除^{そうじ}して報知^{しらせ}にくるか
ら検分をするんだそうだ。それから、出席簿^{しゅつせきぼ}を一応調べてよう
やくお暇^{ひま}が出る。いくら月給で買われた身体^{からだ}だつて、あいた時
間まで学校へ縛^{しば}りつけて机と睨^{にら}めつくらをさせるなんて法があ
るものか。しかしほかの連中はみんな大人^{おとな}しくご規則通りやつ
てるから新参のおればかり、だだを捏^こねるのもよろしくないと思
つて我慢^{がまん}していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過^{すぎ}ま
で学校にいさせるのは愚^{おろ}かだぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさ
アハハと笑つたが、あとから真面目^{まじめ}になつて、君あまり学校の
不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕^{ぼく}だけに話せ、随分妙^{ずいぶん}な
人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分れたか

ら詳くわしい事は聞くひまがなかった。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主ていしゅがお茶を入れましよう
と云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走ちそうをするの
かと思うと、おれの茶を遠慮えんりょなく入れて自分が飲むのだ。この様
子では留守中も勝手にお茶を入れましようを一人ひとりで履行りこうしてい
るかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董しよがこつとうがすきで、と
うとうこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたも
お見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。ちと道
樂にお始めなすつてはいかがですと、飛んでもない勧誘かんゆうをやる。
二年前ある人の使つかいに帝国ホテルへ行つた時は錠前直しと間違え
られた事がある。ケツトを被かぶつて、鎌倉の大仏を見物した時は
車屋から親方と云われた。その外今日まで見損みそくなわれた事は随分
あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやるかと云つ

たものはない。大抵たいていはなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画えを見ても、頭巾ずきんを被かぶるか短冊たんざくを持つてゐるものだ。このおれを風流人だなどと真面目まじめに云うのはただの曲者くせものじゃない。おれはそんな呑気のんきな隠居いんきよのやるような事は嫌きらいだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませんが、いったんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付てつきをして飲んでゐる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼たのんでおいたのだが、こんな苦い濃こい茶はいやだ。一杯飲べいむと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しばって飲んだ。人の茶だと思つて無暗むやみに飲む奴やつだ。主人が引き下がってから、明日の下読したよみをしてすぐ寝ねてしまった。それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つ

て来ると主人がお茶を入れましようとして出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概たいがいは分った。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらいの間は自分の評判がいいだろうか、悪わるいだろうか非常に気に掛かかるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかった。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが三十分ばかり立つと奇麗きれいに消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思っても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響えいきやうを与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈ていするかまるで無頓着むとんじゃくであつた。おれは前に云う通りあまり度胸の据すわつた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどつかへ行くゆ覚悟かくごでいたから、狸たぬきも赤シャツも、ちつとも恐おそろしくはなかった。

まして教場の小僧共こぞうなんかには愛嬌あいぎょうもお世辞も使う氣になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢するが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十とおばかり並ならべておいて、みんなで三円なら安い物だお買いなさいと云う。田舎巡りのへボ絵師いなかまわじやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山かざんとか何とか云う男の花鳥かけものの掛物をもつて来た。自分で床とこの間まにかけて、いい出来じやありませんかと云うから、そうかなと好加減いいかげんに挨拶あいさつをすると、華山には二人ふたりある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅ふくはその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。お買いなさいと催促さいそくをする。金がないと断わると、金なんか、いつでもようござい

ますとなかなか頑固だ。金があつても買わないんだと、その時は追つばら払はらちまつた。その次には鬼瓦おにがわらぐらいな大硯おおすずりを担ぎ込んだ。これは端溪たんけいです、端溪ですと二遍へんも三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたたら、すぐ講釈を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、この眼がんをご覧なさい。眼が三つあるのは珍めずらしい。澆墨はつぼくの具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突つきつける。いくらだと聞くと、持主が支那しなから持つて帰つて来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましょうと云う。この男は馬鹿ばかに相違そういない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、ここう骨董責こつとうぜめに逢あつてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町おおまちと云う所

を散歩していたら郵便局の隣りに蕎麦そばとかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居おつた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれんがぐぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断ことわる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法めつぽうきたない。晝たは色いろが變つてお負おけに砂すなでざらざらしている。壁かべは煤すすで真黒だ。天井てんじやうはランプの油烟ゆえんで燻くすぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいで張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日にさんち前から開業したに違ちがいなかう。ねだん付の第一号に天麩羅てんぷらと

ある。おい天麩羅を持ってこいと大きな声を出した。するとこの時まで隅^{すみ}の方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゅうちゅう食つてた連中^{れんじゅう}が、ひとしくおれの方を見た。部屋^{へや}が暗いので、ちよつと気がつかなかったが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶^{あいさつ}をしたから、おれも挨拶をした。その晩は^{ひさ}久し振^{ぶり}に蕎麦を食つたので、旨^{うま}かつたから天麩羅を四杯平^{たいら}げた。翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちや可笑^{おか}しいかと聞いた。すると生徒の一人^{ひとり}が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さっさと講義を済まして控所へ歸つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。

但し笑うべからず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癩に障つた。冗談も度を過ぎせばいたずらだ。焼餅の黒焦のようなもので誰も賞め手はない。田舎者はこの呼吸が分からないからどこまで押して行つても構わないと云う了見だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触れちらかすんだろう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓みたような小人が出来るんだ。無邪気ならいつしよに笑つてもいいが、こりやなんだ。小供の癖に乙に毒気を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いのか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知つてゐるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じゃろうがな、もしと答

えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに來たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまった。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きなくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんまり腹が立つたから、そんな生意氣な奴は教えないと云つてすたすた歸つて來てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだました。

天麩羅蕎麦もうちへ歸つて、一晚寝たらそんなに肝癪に障ら

かんしゃく

なくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が

分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩

すみた

に住田と云う所へ行つて団子だんごを食つた。この住田と云う所は温

泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行

かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廊ゆうかくがある。おれのはいった団子屋は遊廊の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行つた帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿七銭と書いてある。実際おれは二皿食つて七銭払つた。どうも厄介やつかいな奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廊の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭あかてぬぐいと云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極きめている。ほかの所は何を見ても東京の足元およにも及ばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日はいつてやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛でかける。と

ころが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。
この手拭が湯に染^{そま}つた上へ、赤い縞^{しま}が流れ出したのでちよつと
見ると紅色^{べにいろ}に見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に
乗つてもあるいても、常にぶら下げてゐる。それで生徒がおれ
の事を赤手拭赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住ん
でるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は
浴衣^{ゆかた}をかして、流しをつけて八錢で済む。その上に女が天目^{てんもく}へ
茶を載^のせて出す。おれはいつでも上等へはいった。すると四十
円の月給で毎日上等へはいるのは贅^{ぜいたく}沢だと云い出した。余計な
お世話だ。まだある。湯壺^{ゆつぼ}は花崗石^{みかげいし}を畳^{たた}み上げて、十五畳^{じゅうごじき}敷ぐ
らしいの広さに仕切つてある。大抵^{たいてい}は十三四人^{つか}漬つてゐるがたまに
は誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、運
動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快^{ゆかい}だ。おれは人の居

ないのを見済みすましては十五畳の湯壺を泳ぎ巡まわつて喜んでいた。ところがある日三階から威勢いせいよく下りて今日も泳げるかなとぎくろ口を覗のぞいてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼はりつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はりふだはおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚おどろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵たんていしているように思われた。くさくさした。生徒が何を云ったって、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し^{ただ}狸と赤シャツは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免か^{まぬ}れるのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くもない。月給はたくさんとる、時間は少ない、それで宿直を逃^のがれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当り前だ^{あた}というような顔をして^{まえ}いる。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐^{やまあらし}の説によると、いくら一人^{ひとり}で不平を並べ^{なら}たつて通るものじゃないそう^{ふたり}だ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は might is right という英語を引いて説諭^{せつゆ}を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う

意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔から知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくってもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻つて来た。一体痼性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊つた事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭なら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけでも、これが四十円のうちへ籠っているなら仕方がない。我慢して勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぽかんとしているのは随分間が抜けたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとはいって見たが、西日をまともを受けて、苦しくって居たたまれない。田舎だけあつて秋が

きても、氣長に暑いもんだ。生徒の賄まかないを取りよせて晩飯を済しましたが、まずいには恐れ入おそった。よくあんなものを食くつて、あれだけに暴はれられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまふんだから豪傑ごうけつに違ちがいがない。飯は食くつたが、まだ日が暮くれないから寝ねる訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪わるい事だか知らないが、こうつくねんとして重禁錮じゅうきんこ同様な憂目うきめに逢あうのは我慢の出来るもんじやない。始めて学校へ来た時当直の人とは聞いたら、ちよつと用達ようたしに出たと小使こづかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番が廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛でかけた。赤手拭あかてぬぐいは宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借り

るとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいったりして、ようやく日暮方ひぐれがたになったから、汽車へ乗って古町こまちの停車場ていしやばまで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやつてきたが、擦すれ違ちがった時おれの顔を見たから、ちよつと挨拶あいさつをした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目まじめくさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじゃないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うものだ。おれは腹が立ったから、ええ宿直です。宿直ですから、これから帰つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済まして

あるき出した。豎町たてまちの四つ角までくると今度は山嵐やまあらしに出つ喰くわした。どうも狭せまい所だ。出であるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じゃないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗むやみに出てあるくなんて、不都合ふつごうじゃないか」と云った。「ちつとも不都合なもんか、出であるかない方が不都合だ」と威張いばつてみせた。「君のずばらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒めんどうだぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたつた今逢った。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしようと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭くさいから、さつさと学校へ帰つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽あきたから、寝られなまいまでも床とこへはいろいろと思つて、寝巻に着換かえて、蚊帳かやを捲まくつ

て、赤い毛布けつとを跳ねはのけて、とんと尻持しりもちを突ついて、仰向けあおむになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時からくせの癖だ。わるい癖だと云つて小川町おがわまちの下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込こんだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚ぐな事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末そまつなんだ。掛かけ合うなら下宿へ掛かけ合えと凹へこましてやつた。この宿直部屋は二階じやないから、いくら、どしんと倒たおれても構かまわな。なるべく勢いきおいよく倒れないと寝たような心持がしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤のみのようでもないからこいつあと驚おどろいて、足を二三度毛布けつとの中で振ふつてみた。するとざらざらと当つたものが、急に殖ふえ出して脛すねが

五六カ所、股が二三カ所、尻の下でぐちやりと踏み潰したのが一つ、臍の所まで飛び上がったのが一つ——いよいよ驚ろいた。早速起き上って、毛布をぱつと後ろへ抛ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪るかったが、バツタと相場が極まってみたら急に腹が立った。バツタの癖に人を驚ろかしやがつて、どうするか見ると、いきなり括り枕を取つて、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目が無い。仕方がないから、また布団の上へ坐つて、煤掃の時に塵を丸めて畳を叩くように、そこから近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくつ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴は枕で叩く訳に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事

に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手筈がない。バツタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまっている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治たいじした。箒ほうきを持って来てバツタの死骸しがいを掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼かつとく奴がどこの国にある。間拔まぬけめ。と叱しかつたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒を椽側えんがわへ抛ほうり出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行った。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻うでのまま腕うでまくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バッタた何ぞな」と真先まつさきの一人がいった。やに落ち付いていやる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだろう。

「バッタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生憎あいにく掃き出してしまつて一匹びきも居ない。また小使を呼んで、「さつきのバッタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜はきだめへ棄すててしまいましたが、拾つて参りましょうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云うと小使は急いで馳かけ出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載のせて来て「どうもお氣の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿ばかだ。おれはバッタの一つを生徒に見せて「バッタたこれだ、大きなずう体をして、バッタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の

丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。^こ「篋棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云った。いつまで行つてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」^{たの}

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きじゃけれ、^{ぬく}大方一人でおはいりたのじやあろ」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——さあなぜこんない

たずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等だ。やつら自分で自分のした事が云えないくらいなら、

てんでしないがいい。証拠しょうこさえ挙がらなければ、しらを切るつ

もりで図太く構えていやがる。おれだつて中学に居た時分は少

しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、

尻込みをするような卑怯ひきような事はただの一度もなかった。したも

のはしたので、しないものはしないに極きまつてる。おれなんぞは、

いくら、いたずらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐ついて罰ばつを逃に

げるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたず

らと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来

る。いたずらだけで罰はご免蒙めんこうむるなんて下劣げれつな根性がどこの国

に流行はやると思つてゐるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云

う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。
全体中学校へ何しにはいつてるんだ。学校へはいつて、嘘を吐
いて、胡魔化^{ごまか}して、陰^{かげ}でこせこせ生意気な悪いたずらをして、そ
うして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩^{かんちが}違いをし
ていやがる。話せない雑兵^{ぞうひよう}だ。

おれはこんな腐^{くさ}つた了見^{りようけん}の奴等と談判するのは胸糞^{むなくそ}が悪^{わる}い
から、「そんなに云われなきや、聞かなくつていい。中学校へは
いつて、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と
云^おつて六人を逐^おつ放^{ばな}してやつた。おれは言葉や様子こそあまり
上品じゃないが、心はこいつらよりも遙^{はる}かに上品なつもりだ。
六人は悠々^{ゆうゆう}と引き揚^あげた。上部^{うわべ}だけは教師のおれよりよつぽど
えらく見える。実は落ち付いているだけなお悪い。おれには
到底^{とうてい}これほどの度胸はない。

それからまた床へはいって横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶんぶん唸うなっている。手燭てしよくをつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手つりてをはずして、長く畳たたんでおいて部屋の中で横よこたて堅かた十文字に振ふるつたら、環かんが飛んで手の甲こうをいやというほど撲ぶつた。三度目に床へはいった時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よつぽど辛防強しんぼうい朴念仁ぼくねんじんになるんだろう。おれには到底やり切れない。それを思うと清きよなんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆ばあさんだが、人間としてはすこぶる尊たつとい。今まではあんなに世話になつて別段難有ありがたいとも思わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの

親切がわかる。越後えちごの笹飴ささあめが食いたければ、わざわざ越後まで
買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値は充分じゅうぶんあ
る。清はおれの事を欲がなくつて、真直まつすぐな気性だと云つて、ほ
めるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間
だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然とつぜんおれの頭の上で、
数で云つたら三四十人もあろうか、二階が落つこちるほどどん、
どん、どん、どんと拍子ひょうしを取つて床板を踏みならす音がした。
すると足音に比例した大きな鬨ときの声が上がつた。おれは何事が持
ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端とたんに、は
はあさっきの意趣返いしゅがえしに生徒があばれるのだなと気がついた。
手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消
えないもんだ。わるい事は、手前達に覚おぼえがあるだろう。本来な

ら寝てから後悔こうかいしてあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないまでも恐れ入って、静肅せいしゆくに寝ているべきだ。それを何だこの騒さわぎは。寄宿舎を建てて豚ぶたでも飼つておきあしまいし。氣狂きちがいじみた真似まねも大抵たいていにするがいい。どうするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、櫛はしご子段だんを三股半みまたはんに二階まで躍おどり上がった。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返つて、人声どころか足音もしなくなつた。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然わかんと分らないが、ひとけ人氣のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫つらぬいた廊下には鼠ねずみ一匹びきも隠かくれていない。廊下のはずれから月がさして、遙はるかか向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢ゆめを見る癖があつて、夢中むちゆうに跳ね起きて、わからぬ寢言を

云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかしたしかにあばれたに違いないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。それ見ろ夢じゃないやつぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳け出した。おれの通る路は暗い、ただはすれに見える月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ、

痛い、が頭へひびく間に、身体はすんと前へ抛り出された。こ
ん畜生ちぎしやうと起き上がって見たが、馳けられない。気はせくが、足
だけは云う事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで来
たら、もう足音も人声も静まり返って、森しんとしている。いくら
人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まる
で豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまら
せてやるまではひかないぞと、心を極めて寢室しんしつの一つを開けて
中を検査しようと思つたが開かない。錠じやうをかけてあるのか、机
か何か積んで立て懸かけてあるのか、押おしても、押しても決して
開かない。今度は向う合せの北側の室へやを試みた。開かない事は
やつぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引つ捕つら
まえてやろうと、焦慮いらつてると、また東のはずれで鬨の声と足拍子
が始まつた。この野郎やろう申し合せて、東西相応じておれを馬鹿に

する気だな、とは思ったがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまうが、おれは勇氣のある割合に智慧ちえが足りない。こんな時にはどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどつ子は意気地いくじがないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧はなつた こぞうにからかわれて、手のつけようがなくなつて、仕方がないから泣き寝入りにしたと思われちゃ一生の名折れだ。これでも元は旗本はたもとだ。旗本の元は清和源氏せいわけんじで、ただ まんじゅう こうえい多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓どびやくしやうとは生まれからして違ふんだ。ただ智慧のないところが惜しいだけだ。どうしていいか分らないのが困るだけだ。困つたつて負けるものか。正直だから、どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に勝てなければ、あ

した勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫なでてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだらう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲つかれが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒がしいので、眼めが覚めた時はえつ糞くそしまったと飛び上がった。おれの坐すわつてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返つて、はつと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引ひつ攫つかんで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向あおもむけに倒れた。ざまを見ろ。残る一人がちよつと狼狽ろうばいしたところを、飛びかかつて、肩

を抑えて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱち

ぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てると、弱虫だ

と見えて、一も二もなく尾^ついて来た。夜^よはとうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴^{やつ}を詰問^{きつもん}し始めると、豚は、打^ぶつ

ても擲^ないても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了

見と見えて、けつして白状しない。そのうち一人来る、二人来

る、だんだん二階から宿直部屋へ集まってくる。見るとみんな

眠^{ねむ}そうに瞼^{まぶた}をはらしている。けちな奴等だ。一晚ぐらい寝ない

で、そんな面をして男と云われるか。面でも洗つて議論に來い

と云つてやつたが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答^{おしもんどう}をしてい

ると、ひょつくり狸がやつて来た。あとから聞いたら、小使が

学校に騒動がありますつて、わざわざ知らせに行つたのだそう

だ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草いいぐさもちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな放免ほうめんした。手温てぬるい事だ。おれならそくせき即席に寄宿生をことごとく退校してしまう。こんな悠長ゆうちやうな事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つて、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご授業に及およばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じゃありません。こんな事が每晚あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、頂戴ちやうだいした月給を学校の方へ割戻わりもどします」校長は

何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒い。蚊がよつぽと刺したに相違ない。おれは顔中ぼりぼり掻きながら、顔はいくら膨れたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支えませんと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞めた。実を云うと賞めたんじゃないやあるまい、ひやかしたんだろう。

五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪いように優しい声を出す男である。まるで男だから女だか分りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに

大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじゃ見つともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅こうめの釣堀つりぼりで鮒ふなを三匹びき釣った事がある。それから神楽坂かぐらざかの毘沙門びしゃもんの縁日えんにちで八寸ばかりの鯉こいを針で引つけて、しめたと思つたら、ぼちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜おしいと云いつたら、赤シャツは颯あじを前の方へ突き出してホホホと笑つた。何もそう気取つて笑わなくつても、よさそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣りようや猟りようをする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生せつしようをして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺さ

れるより生きてる方が楽に極きまつてる。釣や猟をしなくつちや
活計かつけいがたたないなら格別だが、何不足なく暮くらしている上に、生
き物を殺さなくつちや寝られないなんて贅沢ぜいたくな話だ。こう思つ
たが向むこうは文学士だけに口が達者だから、議論じや叶かなわないと
思つて、だまつてた。すると先生このおれを降参させたと疇違かんちが
いして、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いつ
しよに行つちや。吉川君よしかわと二人ふたりぎりじや、淋さむしいから、来たま
えとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だ
いこの事だ。この野でいりだは、どういふ了見りようけんだか、赤シャツのうち
へ朝夕出入でいりして、どこへでも随行ずいこうして行く。まるで同輩どうはいじやな
い。主従しゅうじゅうみたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行く
に極きまっているんだから、今さら驚ろおどきもしないが、二人で行けば
済むところを、なんで無愛想ぶあいそのおれへ口を掛かけたんだろう。大

方高慢^{こうまん}ちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもりかなんかで誘^{さそ}つたに違いない。そんな事で見せびらかされるおれじゃない。鮪^{まぐろ}の二匹や三匹釣^つつたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手^{へた}だつて糸^{いと}さえ卸^{おろ}しや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌^{きら}いだから行かないんじゃないと邪推^{じゃすい}するに相違^{そうい}ない。おれはこう考えたから、行きましようと答えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ帰つて、支度^{したく}を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜^{はま}へ行つた。船頭^{ひとり}は一人で、船^{ふね}は細長い東京辺では見た事もない恰好^{かつこう}である。さつきから船中見渡^{みわた}すが釣竿^{つりざお}が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見^{りやうけん}だろうと、野だに聞くと、沖釣^{おきづり}には竿は用いません、糸だけでげすと錨^なを撫^なでて黒人^{くろうと}じみ

た事を云った。こう遣り込められるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕いでいるが熟練は恐ろしいもので、見返えると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のように尖がつてる。向側を見ると青嶋が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めつこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと云つてる。野だは絶景でげすと云つてる。絶景だか何だか知らないが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは葉だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。」

どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそっくりで
すよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、
聞かないでも困らない事だから黙^{だま}っていた。舟は島を右に見て
ぐるりと廻^{まわ}った。波は全くない。これで海だとは受け取りにく
いほど平^{たいら}だ。赤シャツのお陰^{かげ}ではなはだ愉快^{ゆかい}だ。出来る事なら、
あの島の上へ上がってみたいと思^{おも}ったから、あの岩のある所へ
は舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もな
いですが、釣をするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャ
ツが異議を申し立てた。おれは黙^{もく}ってた。すると野だかどうで
す教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありま
せんかと余計な発議^{ほつぎ}をした。赤シャツはそいつは面白い、吾^{われわれ}々
はこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもは
いつてるなら迷惑^{めいわく}だ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上

に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちゃ。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじやないかホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫だいじょうぶですと、ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑った。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那こだんなだろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸えどつ子でげすなどと云つてる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染なじみの芸者の渾名あだなか何かに違ないがないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺ながめていれば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよからう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨いかりを卸した。幾尋いくひろあるかねと赤シャツが聞くと、六尋むひろぐらいだと云う。六尋ぐらいじゃ鯛たいはむずかしいなと、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大將鯛を釣る気と見える、豪胆ごうたんなものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰くり出して投げ入れる。何だか先に錘おもりのような鉛なまりがぶら下がってるだけだ。浮うきがない。浮がなくって釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底とうてい出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云ったら、浮がなくつつちや釣が出来ないのは素人しろうとですよ。こうしてね、糸が水底みずそこへついた時分に、船縁ふなべりの所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸を

たぐり始めるから、何かかかったと思つたら何にもかからない、餌えがなくなつてたばかりだ。いい気味きびだ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違いなかつたんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃げにられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮にと睨にらめくらをしている連中よりはましですね。ちょうど齒どめがなくつちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野みよう達は妙な事ばかり喋しゃべ舌べる。よつぽど撲なぐりつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じやあるまいし。広い所だ。鰹かつおの一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛ほうり込んでいい加減に指の先であやつつていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつ

ちや、こうびくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰^{たぐ}り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐^{おそ}るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸^ついておらん。船縁から覗^{のぞ}いてみたら、金魚のような縞^{しま}のある魚が糸にくつついて、右左へ濺^{ただよ}いながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳^はねたから、おれの顔は潮水だらけになった。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕^{つら}まえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振^ふつて胴^{どう}の間^まへ擲^たきつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野だは驚ろいて見ている。おれは海の中で手をぎぶぎぶと洗って、鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭^{なまぐさ}い。もう懲^こり懲^ごりだ。何が釣れたって魚は握^{にぎ}りたくない。魚も握られたくなかう。そうそう糸を捲

いてしまつた。

一番槍はお手柄だてがらがゴルキじや、と野だがまた生意氣を云う

と、ゴルキと云うと露西亞ロシアの文学者みたような名だねと赤シャ

ツが洒落たしやれ。そうですね、まるで露西亞の文学者ですネと野だ

はすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝しばの

写真師で、米のなる木が命の親だろう。一体この赤シャツはわ

るい癖だくせ。誰だれを捕つかまえても片仮名の唐人とうじんの名を並べたがる。人

にはそれぞれ専門があつたものだ。おれのような数学の教師に

ゴルキだか車力しやりきだか見当がつくものか、少しは遠慮えんりょするがいい。

云いうならフランクリンの自伝だとかプッシング、ツ、ぜ、フ

ロントだとか、おれでも知つてゐる名を使うがいい。赤シャツは

時々帝国文学とかいう真赤まっかな雑誌を学校へ持つて来て難有ありがたそう

に読んでゐる。山嵐やまあらしに聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみん

なあ、あの雑誌から出るんだそう。帝国文学も罪な雑誌だ。

それから赤シャツと野だは一生懸命いっしょうけんめいに釣つっていたが、約一時
間ばかりのうちに二人ふたりで十五六上げた。可笑おかしい事に釣れるの
も、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬にしたくつ
てもありやしない。今日は露西亞文学の大当りだと赤シャツが
野だに話している。あなたの手腕しゅわんでゴルキなんですから、私わたしな
んぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですなと野だが
答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くつて、まずくつ
て、とても食えないんだそう。ただ肥料こやしには出来るそう。だ。
赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣つっているんだ。気の毒の
至りだ。おれは一匹びきで懲こりたから、胴の間へ仰向けになつて、
さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど
洒落しやれている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清きよの事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな奇麗きれいな所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじゃつまらない。清は皺苦茶しわくちやだらけの婆さんだが、どんな所へ連れ出たつて恥はずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、馬車に乘ろうが、船に乘ろうが、凌雲閣りよううんかくへのろうが、到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだつたら、やつぱりおれにへけつけお世辞を使つて赤シャツを冷ひやかすに違ちがいない。江戸っ子は軽薄けいはくだと云うがなるほどこんなものが田舎巡いなかまわりをして、私わたしは江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑

い声の間に何か云うが途切れ途切れでとんと要領を得ない。

「え？　どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バツタを……本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかったが、バツタと云う野だの語を聴いた時は、思わずきつとなった。野だは何のためかバツタと云う言葉だけことさらに力を入れて、明瞭におれの耳にはいるようにして、そのあとをわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞いていた。

「また例の堀田が……」「そうかも知れない……」「天麩羅……ハハハハハ」「……煽動して……」「団子も？」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測ってみると、何でもおれのことについて内所話ないしょばなをしているに相違ない。話すな

らもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏せつただろうが、非はおれにある事じゃない。校長がひとまずあずけろと云ったから、狸たぬきの顔にめんじてただ今のところは控ひかえているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆けふででもしやぶつて引つ込んでるがいい。おれの事は、遅おそかれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支さしつかえはないが、また例の堀田が、とか煽動ほうどうして、とか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動そうどうを大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見ていると、日の光がだんだん弱つて来て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香せんこうの烟けむりのような雲が、透すき徹ととおる底の上を静かに伸のして行つたと思つたら、いつしか底の奥おくに流れ込

んで、うすくもやを掛けたようになった。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちやうど時分ですね。今夜はマドンナの君にお逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿あ云っちゃいけない、間違ひになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返った時、おれは皿のような眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやった。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を掻いた。何という猪口才だろう。

船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀の足で掻き分けられた浪の上を揺られな

がら漾ただよつていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでゐるから、奮発ふんぱつしてやつてくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故えんこもない事を云い出した。「あんまり喜んでもないでしょう」「いえ、お世辞じゃない。全く喜んでゐるんです、ね、吉川君」「喜んでるどころじゃない。大騒おおさわぎです」と野だはにやにやと笑つた。こいつの云う事は一々癩しやくに障さわるから妙だ。「しかし君注意しないと、險吞けんのんですよ」と赤シャツが云うから「どうせ險吞けんのんです。こうなりや險吞けんのんは覚悟かくごです」と云つてやつた。實際おれは免職めんしよくになるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どっちか一つにする了見でいた。「そう云っちゃ、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のためを思うから云うんだが、わるく取おつちや困る」「教頭は全く君に好意を持ってるんですよ。僕も及おばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校

を願つて、お互^{たがい}に力になろうと思つて、これでも蔭ながら^{じんりよく}尽力してゐるんですよ」と野だが人間並^{なみ}の事を云つた。野だのお世話になるくらいなら首を縊^くつて死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の來たのを大變歡迎^{かんげい}してゐるんだが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢^{がまん}だと思つて、辛防^{しんぼう}してくれたまえ。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情た、どんな事情です」

「それが少し込み入つてゐるんだが、まあだんだん分りますよ。僕^{ぼく}が話さないでも自然と分つて来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分つて来るです」と野だは赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒めんどうな事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うかがうんです」

「そりゃごもつともだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を云つておきましよう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊たんぱくには行ゆかないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏とぼしいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずですよ。履歴書りれきしょにもかいたきました。が二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰だれが乗じたつて怖こわくはないです」

「無論怖こわくはない、怖こわくはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけなと云うんです」

野だが大人おとなしくなつたなと気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫ともの方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんですよ。よつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰だれに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉に關係するから云えない。また判然と証拠しょうこのない事だから云うとこつちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かいがない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いいでしよう」

赤シャツはホホホと笑った。別段おれは笑われるような事を云った覚えはない。今日^{こんにち}ただ今に至るまでこれでいいと堅く^{かた}信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励^{しょうれい}しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋^{じゅんすい}な人を見ると、坊^ぼっちゃんだの小僧^{こぞう}だのと難癖^{なんくせ}をつけて軽蔑^{けいべつ}する。それじゃ小学校や中学校で嘘^{うそ}をつくな、正直にしろと倫理^{りんり}の先生が教えない方がいい。いつそ思い切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホと笑ったのは、おれの単純なのを笑ったのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がな。清はこんな時に決して笑った事はない。大いに感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪^{わる}い事をしなければ好いんですが、自分だけ悪^{わる}い事をしなくつても、人の悪^{わる}いのが分らなくつちや、やつぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊^{らい}落^{らく}なように見えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めったに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、浜の方は靄^{もや}でセピヤ色になつた。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……。」と大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや奇^き絶^{ぜつ}ですね。時間があると写生するんだが、惜^おしいですね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛^{ふえ}がヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯^{いそ}の砂へざぐりと、舳^{へさき}をつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立って赤シャ

ツに挨拶する。おれは船端から、やつと掛声をして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたつて、あの面じゃ駄目だ。惚れるものがある。たつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えてみると一応もつともものようでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから

用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するが
いい、男らしくもない。そうして、そんな悪^{わる}い教師なら、早
く免職^{めんしよく}したらよからう。教頭なんて文学士の癖^{くせ}に意気地^{いきじ}のな
いもんだ。蔭口^{かげぐち}をきくのでさえ、公然と名前が云えないくらい
な男だから、弱虫に極^きまつてる。弱虫は親切なものだから、あ
の赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声
は声だから、声が氣に入らないって、親切を無にしちや筋^ぢが違
う。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が
親切で、氣のあつた友達^{わとも}が悪漢^{わるもの}だなんて、人を馬鹿^{ばか}にしている。
大方田舎^{いなか}だから万事東京のさかに行くんだらう。物騒^{ぶつそう}な所だ。
今に火事が氷^こって、石^{いし}が豆腐^{とうふ}になるかも知れない。しかし、あ
の山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。
一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵^{たいてい}の事

は出来るかも知れないが、——第一そんな廻りくどい事をしないでも、じかにおれを捕まえて喧嘩を吹き懸けりや手数が省ける訳だ。おれが邪魔になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談ずくでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしないつもりだ。山嵐もよつぽど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢ったのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらつちや、おれの顔に関わる。おれはたつた一杯しか飲まなかったから一錢五厘しか払わしちやない。しかし一錢だろうが五厘だろうが、詐欺師の恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行ったら、一錢五

厘返しておこう。おれは清きよから三円借りている。その三円は五年経たつた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐中かいちゆうをあてにしているはない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏ふみつけるのじゃない、清をおれの片破かたわれと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水だろうが、甘茶あまचाだろうが、他人から恵めぐみを受けて、だまつているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有ありがたいと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独

立した人間が頭を下げるのは百万両より尊たつといお礼と思わなければならぬ。

おれはこれでも山嵐に一錢五厘ふんぼつ奮ありがた発させて、百万両より尊とい返礼をした氣でいる。山嵐は難有いと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻ひれつつて卑劣な振舞ふるまいをするとは怪けしからん野郎やろうだ。あした行つて一錢五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまつた。あくる日は思う仔細しさいがあるから、例刻より早や目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツまで出て来たが山嵐の机の上は白墨はくぼくが一本たて豎たてに寝ているだけで閑静かんせいなものだ。おれは、控所ひかえじよへはいるや否や返そ

うと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一銭五厘、学校まで握にぎつて来た。おれは膏あぶらつ手だから、開けてみると一銭五厘が汗あせをかいている。汗をかいてる銭を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握つた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷惑めいわくでしたらうと云つたから、迷惑じゃありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱ひじを突ついて、あの盤ばん台だい面づらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しやしますまいねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一銭五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから

口留めをされちゃ、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さらその謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを削けずつてる真中へ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つというもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君ほったの事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつもりで来たんじゃないやなかうと妙みょうに常識をはずれた質問をするから、当あたり前まえです、月給をもらつたり、騒動を起したりし

ちや、学校の方でも困るでしようと云った。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなと汗をかいて依頼いらひに及ぶおよから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましうと受け合つた。君大丈夫かいと赤シャツは念を押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきがわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄つじつまの合わない、論理に欠けた注文をして恬然てんぜんとしてゐる。しかもこのおれを疑ぐつてる。憚りはばかながら男だ。受け合つた事を裏へ廻ほつて反古ぼこにするようなさもしう了見りようけんはもつてるもんか。

ところへ両隣りようどなりの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ歸つて行つた。赤シャツは歩あるき方から氣取つてる。部屋の中を往来するのも、音を立てないように靴くつの底をそつと

おと
落す。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知った。泥棒どろぼうの稽古けいこじゃあるまいし、当り前にするがいい。やがて始業の喇叭らっぱがなった。山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛でかけた。

授業の都合つごうで一時間目は少し後おくれて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻ちこくしたんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金ばつぎんを出したまえと云つた。おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取っておけ。先達せんだつとおりちようで飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてゐるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目まじめでいるので、つまらない冗談じようだんをするなと錢をおれの机の上に掃はき返

した。おや山嵐の癖くせにどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁いんえんがないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一銭五厘が気になるなら取ってもいいが、なぜ思ひ出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云った。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤まっかになつてゐるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがお

れの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主ていしゅが来て君に出ても
らいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の云うのはもつと
もだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝けさあすこへ寄つ
て詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう
自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話す
が順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千萬な
事を云うな」

「うん、そんなら云ってやろう。君は乱暴であの下宿で持て余あ
まされているんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ちがうぜ。
足を出して拭ふかせるなんて、威張いばり過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじゃ、君に困つてゐるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物かけものを一幅ぶく売りや、すぐ浮ういてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎やろうだ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云うんだらう。君出てやれ」

「当り前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一体そんな云い懸りがを云うような所しゆせんへ周旋する君からしてが不埒ふらちだ」

「おれが不埒か、君が大人おとなしくないんだか、どつちかだらう」

山嵐もおれに劣おとらぬ肝癪かんしゃく持ちだから、負け嫌ぎらいな大きな声を

出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顎あごを長くしてぼんやりしている。おれは、

別に恥はずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡みまわしてやった。みんなが驚おどろいてるなかに野だけは面白そうに笑っていた。おれの大きな眼めが、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢かんぴょうぶらを射貫いぬいた時に、野だは突然真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖こわかったと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についてようすの会議だ。会議というものは生れて始めてだからとんと容子ようすが分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減まに纏めるのだらう。纏めるといふのは黒白こくびやくの決しかねる事柄ことがらについて云うべき言葉だ。この場合

のような、誰が見たつて、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇潰^{ひまつぶ}しだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座^{そくざ}に校長が処分してしまえばいいに。随分決断^{ずいぶん}のない事だ。校長つてもものが、これならば、何の事はない、煮え切^にらない愚図^{ぐず}の異名だ。

会議室は校長室の隣^{とな}りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張った椅子^{いす}が二十脚^{きやく}ばかり、長いテーブルの周囲に並^{なら}んでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端^{はじ}に校長が坐^{すわ}つて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第に席に着くんだそうだが、体操^{たいそう}の教師だけはいつも席末に謙遜^{けんそん}するという話だ。おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込^こんだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう考えても劣等だ。喧嘩はし

ても山嵐の方が遙かに趣がある。おやじの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかかつてた懸物はこの顔によく似ている。坊主に聞いてみたら韋駄天と云う怪物だそうだ。今日は怒つてゐるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされてたまるもんかと、おれも負けない気で、やつぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云つたくらいだ。

もう大抵お揃いでしようかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の

因縁かしないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中をあるいていても、うらなり先生の様子^{うか}が心に浮ぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔^{あお}をして湯壺^{ゆつば}のなかに膨^{ふく}れている。挨拶をする^{あいさつ}とへえと恐縮^{きようしゆく}して頭を下げるから氣の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めつたに笑った事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢^あつてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい關係の深い人の事だから、會議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ氣がついた。実を云うと、この男の次へでも坐^すわろうかと、ひそかに目標^{めじるし}にして來たくらいだ。

校長はもうやがて見えるでしようと、自分の前にある紫の袱紗包むらさき ふくさづつみをほどいて、菟荊版こんにやくぼんのような者を読んでいる。赤シャツは琥珀こはくのパイプを絹ハンケチで磨みがき始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語ささやき合っている。手持無沙汰てもちぶさたなのは鉛筆えんぴつの尻しりに着いている、護謨ゴムの頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖こわい眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨にらめ返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありました、遅刻いた致いたしましたと慇懃いんぎんに狸たぬきに挨拶あいさつをした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に菟荊版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締とりしまりの件、その

他二三ヶ条である。狸は例の通りもつたいぶつて、教育の生霊いきりようという見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳かとくの致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧ざんきの念に堪たえんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事實はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎とがだとか、不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職めんしよくになつた

ら、よさそうなもんだ。そうすればこんな面倒な会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つてゐる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒だけに極つてゐる。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治ればそれでたくさんだ。人の尻を自分で背負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸でなくつちや出来る芸当じゃない。彼はこんな条理に適わない議論を吐いて、得意氣に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に鳥がとまつてゐるのを眺めてゐる。漢学の先生は蒟蒻版を畳んだり、延ばしたりしてゐる。山嵐はまだおれの顔をにらめてゐる。会議と云うものが、こんな馬鹿げたものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞しまのある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云っている。あの手巾はんけちはきつとマドンナから巻き上げたに相違そういない。男は白い麻あさを使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届ふゆきとどきであり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚はずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠かんけつがあると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえつて未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血氣のものであるから活氣があふれて、善惡の考えはなく、半ば無意識

にこんな悪戯いたずらをやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙ようかいする限りではないが、どうかその辺をしんしゃくご斟酌しんしゃくになつて、なるべく寛大なお取計とりはからいを願いたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。氣狂きちがいが人の頭をなぐ撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、氣狂がなぐるんだそうだ。難有ありがたい仕合せだ。活氣にみちて困るなら運動場へ出て相撲すもうでも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸ねくびをかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろう。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、云うなら人を驚ろすかように滔々とうとうと述べたてなくつちやつまらない、お

れの癖として、腹が立つたときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞^{つま}ってしまう。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋^{しゃべ}舌つて揚^{あげ}足を取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみよう
と、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。
野だは例のへらへら調で「実に今回のバッタ事件及び咄^{とつ}喊^{かん}事件は吾^{われ}々心ある職員をして、ひそかに吾^{わが}校将来の前途^{ぜんと}に危^き惧^ぐの念を抱^{いだ}かしむるに足る珍^{ちん}事^じでありまして、吾々職員たるものはこの際奮^{ふる}つて自ら省りみて、全校の風紀を振肅^{しんしゅく}しなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになったお説は、実に肯綮^{こうけい}に中^{あた}つた剴切^{がいせつ}なお考えで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大^{かんだい}のご処分^{あお}を仰ぎたいと思います」と云つた。

野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起ち上がってしまった。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢な、処分は大嫌いです」とつけたら、職員が一同笑い出した。「一体生徒が全然悪るいんです。どうしても詫まらせなくっちゃ、癖になります。退校さしても構いません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするとかえつて反動を起していけないでしょう。やつぱり教頭のおっしゃる通り、寛な方に賛成

します」と弱い事を云った。左隣の漢学は穩便説おんびんせつに賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云った。忌々しいいまいまい、大抵のものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ歸つて荷作りをする覚悟かくごでいた。どうせ、こんな手合てあいを弁口べんこうで屈伏くつぷくさせる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄すましていた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓ガラスを振ふるわせるよ

うな声で「私は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮してこれを翻弄しようとした所為とより外には認められんのであります。教頭はその原因を教師の人物いかに求めになるようですが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃であります。この短かい二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌を加える理由もありましようが、何らの原因もないのに新来の先生を愚弄するような軽薄な生徒を寛宥しては学校の威信に関わる事と思ひます。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士

的な元氣を鼓吹こすいすると同時に、野卑やひな、輕躁けいそうな、暴慢ぼうまんな惡風を掃蕩そうとうするにあると思います。もし反動が恐おそろしいの、騷動きようどうが大きなものゝと姑息こそくな事を云つた日にはこの弊風へいふうはいつ矯正きようせい出来るか知れません。かかる弊風とぜつを杜絶とぜつするためにこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃みがすくらいなら始めから教師にならん方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰げんばつに処する上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰こしを卸おろした。一同はだまつて何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭ふき始めた。おれは何だか非常に嬉うれしかった。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすっかり言ってくれたようなものだ。おれはこう云う單純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有ありがたいと云う顔をもつて、腰

を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面かおをしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して

言い落おとしましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出し

て温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考え

ます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎とがめ

る者のないのを幸さいわいに、場所もあろうに温泉などへ入湯にいくな

どと云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点に

ついては校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばい

ている。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つ

て、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまったんだ

が、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪かった。

攻撃こうげきされても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に

宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまり奴等だ。やつら貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましょうと云った。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になった上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだったがなまじい、おれのいう通りになったのでとうとう大変な事になってしまった。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云った。生徒の風儀は、ふうぎ教師の感化で正していかなくてはならん、その一着手として、

教師はなるべく飲食店などに出入しゅつにゅうしない事にしたい。もつとも

送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所

へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——

と云いかけたらまた一同が笑った。野だが山嵐を見て天麩羅てんぷらと

云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかつた。いい気味きびだ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らない
が、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくつちや、

おれみたような食い心棒しんぼうにや到底出来とうていつ子ないと思つた。それ

なら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注

文して雇やとうがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食

うな、団子を食うなと罪なお布令ふれを出すのは、おれのような外

に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツが

また口を出した。「元来中学の教師などは社会の上流にくらいす

るものだからして、単に物質的の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ふけるとつい品性にわるい影響えいきやうを及ぼすようになる。しかし人間だから、何か娛樂ごらくがないと、田舎いなかへ来て狭い土地では到底暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚こうしような精神的娛樂を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて肥料こやしを釣つたり、ゴルキが露西亞ロシアの文学者だったり、馴染なじみの芸者が松まつの木の下に立ったり、古池かわずへ蛙が飛び込んだりするのが精神的娛樂なら、天麩羅を食つて団子を吞のみ込むのも精神的娛樂だ。そんな下さらない娛樂を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立ったから「マドンナに逢あうのも精神的娛樂ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をし

て互たがいに眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ気の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云ったら蒼い顔をますます蒼くした。

七

おれは即夜そくや下宿を引き払はらった。宿へ帰って荷物をまとめていると、女房にようぼうが何か不都合ふつごうでもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云いつておくれたら改めますと云う。どうも驚おどろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃そろつてゐるんだろう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分わかりやしない。まるで氣狂きちがいだ。こんな者を相手に喧嘩けんかをしたって江戸えどつ子の名折れだから、車屋をつれて来てさつさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾^ついて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて来た。面倒^{めんどう}だから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板^{かな}のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意^{かな}に叶^{かな}ったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静^{かんせい}で住みよさそうな所がある。いてゐるうち、とうとう鍛冶屋^{かじや}町へ出てしまった。ここは士族^{やしき}屋敷で下宿屋などのある町ではないから、もつと賑^{にぎ}やかな方へ引き返そうかとも思つたが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷^{ひか}を控^{ひか}えているくらいだから、この辺の事情には通じてゐるに相違^{そうい}ない。あの人を尋^{たず}ねて聞いたら、よ

さそうな下宿を教えてくれるかも知れない。幸一度挨拶あいさつに来て勝手は知ってるから、捜さがしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけて、ご免めんご免と二返ばかり云うと、奥おくから五十ぐらいな年寄としよりが古風な紙燭しそくをつけて、出て来た。おれは若い女も嫌いきらいではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持こもちがする。大方きよ清がすきだから、その魂たましいが方々のお婆ばあさんかに乗り移るんだろう。これは大方うらなり君のおつ母さんかだろう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりげんかんと云うところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を玄関げんかんまで呼び出して実はこれこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお困りはぎのでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野と云つて老人夫婦くぎりで暮らしているものがある、いつ

ぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼たのんだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいつしよに行つて聞いてみましよう、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚おどろいたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日あくるひから入れ違ちがひに野だが平氣な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりょうした事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互たがいに乗せつこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並せけんなみにしないくちや、遣やりきれない訳になる。巾着切きんちやくきりの上前をはねなければ三度のご膳ぜんが戴いたけないと、事が極きまればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊くつ

ちや先祖へ済まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへはいって、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百円を資本もとでにして牛乳屋でも始めればよかった。そうすれば清もおれの傍そばを離れずはなに済むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しくらずに暮される。いつしよに居るうちは、そうでもなかったが、こうして田舎いなかへ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな気立きだてのいい女は日本中さがして歩いたってめったにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪かぜを引いていたが今頃いまごろはどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだろう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねたずねてみるが、聞きたんびに何にも参りませんと気の毒

そんな顔をする。ここの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜るになると、変な声を出して謡をうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようとならぬに出で来ないから大きに樂だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れなさつて、いつしよにお出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十でお嫁をお貰いたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁を試みたには恐れ入った。それじゃ僕も二十四でお嫁をお貰いけるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似て頼んでみたら、お婆さ

ん正直に本当かなもと聞いた。

「本当の本当ほんまのつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方ないんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおりなさるに極きまつとらい。私はちやんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚おどろいた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子おなごは、昔むかしと違ちがうて油断が出来んけれ、お気を

お付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やつと安心した。それじゃ何を気を付けるんですい」
「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等にも大分居おります。先生、あの遠山のお嬢さんじょうをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪さんべっぴんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きんのかな

もし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人とうじんの言葉で、別嬪べっぴんさんの事じやろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生よしかわがお付けたのじやがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介やっかいだね。渾名あだなの付いてる女にや昔むかしから碌ろくなもの居ませんからね。そうかも知れませんかよ」

「ほん当にそうじやなもし。鬼神きじんのお松まつじやの、姉妃だつきのお百じや

のてて怖い女が居おりましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをこへ世話やくそくをしておくれた古賀先生なもし——あの方の所へお嫁よめに行く約束が出来ていたのじゃがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福えんぷくのある男とは思わなかった。人は見懸みかけによらない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀行の株も持ってお出いでるし、万事都合つごうがよかったのじゃが——それからというものは、どういふものか急に暮し向きが思わしくなくなつて——つまり古賀さんがあまりお人よすが好過よすぎるけれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、こ

れやでお興入^{こしいれ}も延びているところへ、あの教頭さんがお出^いでて、是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴^{やつ}だ。どうもあのシャツはただのシャツじゃないと思つてた。それから？」

「人を頼^{たの}んで懸合^{かけあ}うておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓^{てづる}を求めて遠山さんの方へ出入^{でいり}をおしるようになった、とうとうあなた、お嬢^{お嬢}さんを手馴^{てなづ}付けておしまいたのじゃがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢さんもお嬢さんじゃてて、みんなが悪^{わる}く云いますのよ。いったん古賀さんへ嫁に行くてて承知をしときながら、今さら学士さんがお出^いたけれ、その方に替^かえよてて、それじゃ今日^{こんにち}様へ済むまいがなも

し、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、いつまで行つたつて済みつこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒じやてて、お友達の堀田さんほったが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじゃ、遠山家と交際するには別段古賀さんに済まん事もなからうとお云いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りもどたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合おりあいがわるいという評判くわぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狭い^{せま}けれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子^{ようす}じゃおれの天麩羅^{てんぷら}や団子^{だんご}の事も知ってるかも知れない。厄介^{やっかい}な所だ。しかしお蔭様^{かげさま}でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どっちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある方^{かた}ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は

堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどつちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いえらのじやろうがなもし」

これじや聞いたつて仕方がないから、やめにした。それから
二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待
遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持って来てゆつく
りご覧と云つて出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。
符箋ふせんが二三枚まいついてるから、よく調べると、山城屋から、いか
銀の方へ廻まわして、いか銀から、萩野はぎのへ廻つて来たのである。そ
の上山城屋では一週間ばかり逗留とまりゆうしている。宿屋だけに手紙ま
で泊とめるつもりなんだらう。開いてみると、非常に長いもんだ。
坊ぼっちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、
あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つい

遅く^{おそ}なつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥^{おい}に代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかなくつちや、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下^したがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かつた。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命^{いっしょうけんめい}にかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭^{ぼうとう}で四尺ばかり何やらかやら認^{したた}めてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵^{たいてい}平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのか句読^{くとう}をつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦^せつ勝^かちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目^{まじめ}に

なつて、始はじめから終しまひまで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつかないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽えんばな鼻へ出て腰こしをかけながら鄭寧ていねいに拝見した。すると初秋はつあきの風が芭蕉ばしやうの葉を動かして、素肌すはだに吹ふきつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがささりさりと鳴つて、手を放すと、向むこうの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構かまつていられない。坊っちゃんかんしやくは竹を割つたような気性だが、ただ肝癪あだなが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗むやみに渾名なんか、つけるのは人に恨うらまれるもとなるから、やたらに使つかつちやいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。

——田舎者は人がわるいそうだから、氣をつけてひどい目に遭あ

わないうようにしろ。——氣候だつて東京より不順に極つてゐるから、寝冷ねびえをして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼りたよになるはお金ばかりだから、なるべく儉約けんやくして、万一の時に差支さしかえないようにしなくっちゃいけない。——お小遣こづかいがなくて困るかも知れないから、為替かわせで十円あげる。——先せんだつて坊っちゃんからもらった五十円を、坊っちゃんが、東京へ帰つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込こんでいる

と、しきりの襖をふすまあけて、萩野のお婆さんが晩めしを持ってきた。まだ見てお出いでるのかなもし。えっほど長いお手紙じゃなもし、と云ったから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳ぜんについた。見ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮つけだ。このうちは、いか銀よりも鄭寧ていねいで、親切で、しかも上品だが、惜おしい事に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。うらなり君を笑うどころか、おれ自身みづかが遠からぬうちに、芋のうらなり先生になっちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪まぐろのさし身か、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食わせるんだが、貧乏士族びんぼうしのけちん坊ぼうと来ちや仕方がない。どう考えても清といっしょでなくつちあ駄目だめだ。もしあの学校に長く

でも居る模様なら、東京から召よび寄よせてやろう。天麩羅蕎麦そばを食くつちやならない、団子だんごを食くつちやならない、それで下宿に居て芋ばかり食くつて黄色くなっているなんて、教育者はつらいものだ。禪宗坊主ぜんしゅうだつて、これよりは口に栄耀えいようをさせているだろう。——おれは一皿の芋を平ひらげて、机ひきだしの抽斗ひきだしから生卵なまたまごを二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割わつて、ようやく凌しのいだ。生卵なまたまごでも營養をとらなくつちあ一週二十一時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅おそくなった。しかし毎日行いきつけたのを一日でも欠かかすのは心持こころもちちがわるい。汽車にでも乗のつて出懸でかけようと、例あかてぬぐいの赤手拭あかてぬぐいをぶら下たげて停車場ていしやばまで来ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰こしを懸しけて、敷島しきしまを吹ふかしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君がやつて来た。おれはさっきの話を聞いてから、うらなり君

がなおさら氣の毒になつた。平常ふだんから天地の間に居候いそうろうをしてい
るように、小さく構かまえているのがいかにも憐あわれに見えたが、今
夜は憐れどころの騒さわぎではない。出来るならば月給を倍にして、
遠山のお嬢さんと明日あしたから結婚けっこんさして、一ヶ月ばかり東京へで
も遊びにやつてやりたい氣がした矢先だから、やお湯ですか、さ
あ、こつちへお懸おそけなさいと威勢いせいよく席ゆずを譲ると、うらなり君は
恐れ入おそつた体裁で、いえ構かまうておくれなさるな、と遠慮えんりよだか何
だかやつぱり立つてる。少し待たなくつちや出ません、草臥くたびれ
ますからお懸おそけなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そ
ばへ懸おそけてもらいたかつたくらいに氣の毒でたまらない。それ
ではお邪魔じやまを致いたしましょうとようやくおれの云う事を聞いてく
れた。世の中には野だみたように生意氣な、出ないで済む所へ
必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや日本にっぽん

が困るだろうと云うような面を肩かたの上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆々みなみなそれ相応に威張ってるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人おとなしくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぼど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄ったって、これほど立派な旦那様だんなさまが出来るもんか。

「あなたはどつか悪いんじゃないですか。大分たいぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持病もないですが……」「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」

「あなたは大方じょうぶご丈夫じょうぶのようすな」

「ええ瘠やせても病氣やはしません。病氣なんてものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声きこが聞えたから、何心なく振り返ってみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並ならんで切符きつぷを売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶すいしゅうの珠たまを香水こうすいで暖あつためて、掌てのひらへ握にぎつてみたような心持こもちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端とたんに、うらなり君の事は全然すつかり忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然とつぜんおれの隣となりから、

立ち上がつて、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思つた。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つていると、また一人あわてて場内へ馳^かけ込^こんで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮^{ちりめん}緬の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖^{きんぐさ}りをぶらつかしている。あの金鎖^{にせもの}りは贗物である。赤シャツは誰^{だれ}も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてる。赤シャツは馳^{うりさげ}け込んだなり、何かきよろきよろしていたが、切符売下所^{うりさげじよ}の前に話している三人へ慇懃^{いんぎん}にお辞儀^{じぎ}をして、何か二一こと、三三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足^{ねこあし}にあ

るいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍そばへ腰を卸おろした。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に顚あじをのせて、正面ばかり眺ながめている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違ちがひない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾われ勝がちに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れるところではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭だから、わずかに二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発ふんぱつして白切符を握にぎつてゐるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たつた二銭の出

入でもすこぶる苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の体であつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆつぽへ下りてみたら、

またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だが、平常ふだんは随分弁ずいぶんずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぽくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰なぐさめて

やるのは、江戸えどっ子の義務だと思つてゐる。ところがあいにくう
らなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乗つてくれな
い。何を云つても、えとかい、えとかぎりで、しかもそのえとい
えが大分めんどう面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつ
ちからご免蒙めんこうむつた。

湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂ふろの数はた
くさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うと
は極まつていない。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出て
みるといい月だ。町内の両側やなぎに柳が植うわつて、柳の枝えだが丸まるい影
を往来の中へ落おとしている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町
のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお
寺で、左右が妓楼ぎろうである。山門のなかに遊廊ゆうかくがあるなんて、前
代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議

の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾のれんをかけた、小さな格子窓こうしまどの平屋はおれが団子を食つて、しくじった所だ。丸提灯まるぢようちんに汁粉しるこ、お雑煮ぞうじとかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端のきばに近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁いいなずけが他人に心移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思ふと、団子おろは愚か、三日ぐらい断食だんじきしても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜とうがんの水膨れみずぶくれのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊たんぱくだと思つた山嵐は生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動したのかと思う

と、生徒の処分を校長に逼るし。厭味で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所ながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを胡魔化したり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖をつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公が入れ替つたり——どう考えてもあてにならない。こんな事を清にかいてやったら定めて驚く事だろう。箱根の向うだから化物が寄り合つてるんだと云うかも知れない。

おれは、性来構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒に思い出した。別段際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取つたような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よからう。

などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤へ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村には観音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影が見え出した。月に透かしてみると影は二つある。温泉へ来て村へ帰る若い衆かも知れない。それにしては唄もうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を

聞きつけて、十間ぐらいの距離きよりに逼った時、男がたちまち振り向いた。月は後うしろからさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思つた。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追つ懸かけた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖そでを擦すり抜けぬぎざま、二足前へ出した踵くびすをぐるりと返して男の顔を覗のぞき込こんだ。月は正面からおれの五分刈がりの頭から顚あたの辺りまで、会釈えしやくもなく照てらす。男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促うながすが早いか、温泉ゆの町の方へ引き返した。

赤シャツは図太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損そく

なつたのかしら。ところが狭くて困つてるのは、おればかりではなかつた。

八

赤シャツに勧められて釣^{つり}に行つた帰りから、山嵐^{やまあらし}を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒^{ふらち}な奴^{やつ}だと思つた。ところが会議の席では案に相違^{そうい}して滔々^{とうとう}と生徒^{げんぱつろん}厳罰論を述べたから、おや変だなと首を振^{ひね}つた。萩野^{はぎの}の婆^{ばあ}さんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍^うつた。この様子ではわる者は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲つてるんで、好加減^{いいかげん}な邪推^{じゃすい}を實^{まこと}しやかに、しかも遠廻^{とおまわ}しに、おれの頭の中へ浸^しみ込^こま

したのではあるまいかと迷つてゐる矢先へ、野芹川のぜりがわの土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者くせものだと極めてしまった。曲者だか何だかよくは分らないが、ともかくも善い男じゃない。表と裏とは違つた男だ。人間は竹のように真直まつすぐでなくつちや頼たのもしくない。真直なものは喧嘩けんかをしても心持ちがいい。赤シャツのようなやさしいのと、親切なのと、高尚こうしようなのと、琥珀こはくのパイプとを自慢じまんそうに見せびらかすのは油断が出来ない、めつたに喧嘩も出来ないと思つた。喧嘩をしても、回向院えこういんの相撲すもうのような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなると一錢五厘でいりの出入ひかえじよで控所全体を驚おどろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼かなつばまなこをぐりつかせて、おれを睨にらめた時は憎い奴だと思つたが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声ねこなでこえよりは

ました。実はあの会議が済んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一錢五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになつて乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一錢五厘が二人の間の墻壁になつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑として黙つてゐる。おれと山嵐には一錢五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一錢五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在来のおれを保つて、交際をつづけている。野

芹川で逢^あつた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍^{そば}へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしよに露^ロ西^{シア}文学を釣^つりに行こうじゃないかのといろいろな話を話しかけた。おれは少々憎^{にく}らしかったから、昨夜^{ゆうべ}は二返逢^いいましたねと云^いつたら、ええ停車場^{ていしやば}で——君はいつでもあの時分出掛^{でか}けるのですか、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸^かりましたねと喰^くらわしてやったら、いいえ僕^{ぼく}はあっちへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰^{かえ}つたと答^{こた}えた。何もそんなに隠^{かく}さないでもよからう、現に逢^あつてるんだ。よく嘘^{うそ}をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなった。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随^{ずいぶん}分^み妙^{みょう}なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾錢だそうだ。田舎へ来て九円五拾錢払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと云つたら、赤シャツの弟が取次に出て来た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわるい子だ。その癖渡りものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪るい。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれるから、前任者の時代よりも成績がよくあがつて、校

長も大いにいい人を得たと喜んでいたので——どうか学校でも信頼しんらいしているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強じゆうぶんつて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゆうぶんです。ただ先だつてお話しした事です、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣呑けんおんだという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——

精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精しゅつせいして下されば、学校の方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして都合つごうさえつけば、待遇たいぐうの事も多少はどうにかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上があれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが——その俸給から少しは融通ゆうずうが出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと思うんですがね」

「どうも難有ありがとう。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支つかえないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だつてこの人じゃありませんか」

「この地じの人ですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行くゆんです」

「日向ひゅうがの延岡のべおかで——土地が土地だから一級俸上あがつて行く事になりました」

「誰^{だれ}か代りが来るんですか」

「代りも大抵^{たいてい}極まつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂^{いた}だかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか今からそのつもりで覚悟^{かくご}をしてやつてもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言いにくい——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つてもらうかも知れない

という意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさんなかなか辞職する氣遣いきづかはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職めんしよくは学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さようならと、そこそこに帰つて来た。ほつく発句は芭蕉ばしやうか髪結床かみいどこの親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔つるべやに釣瓶をとられてたまるものか。

帰つてうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通つて^{かよ}る所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云うところによると船から上がつて、一日馬車へ乗つて、^{いちんち}宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人^{さる}とが半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数^{ものずき}奇だ。

ところへあいかわらず婆^{ばあ}さんが夕食^{ゆうめし}を運んで出る。今日もま

た芋いもですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐とうふぞなもと云つた。どっちにしたって似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお気の毒じゃな、もし」

「お気の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじやありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺ほらえもん右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんです」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したかなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりてから、あたし達が思うほど暮し向が豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやしておくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとうとうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰があるぞ、今月か来月かと首を長くして待っておいでたところへ、校長さんがちよつ

と来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、氣の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続きにしたから行くがええと云われたげな。――」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居おりたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白おもしろくもない。じゃ古賀さんは行く氣はないんですね。どうれで変だと思つた。五円ぐらい上がつたつて、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐変木とうへんぼくはまづな

いからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略さりやくだね。よくない仕打しうちだ。まるで欺撃だましうちですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げてやるったって、誰が上がつてやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるって云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断わりるのぞなもし」

「何でもお断わりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。
卑怯ひきようでさあ」

「卑怯でもあんだ、月給を上げておくれたら、大人おとなしく頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじゃが、年を

とつてから考えると、も少しの我慢がまんじゃあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損をしたと悔くやむのが当り前じゃけれ、お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難有ありがとうと受けておおきなさいや」

「年寄としよりの癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまって引き込んだ。爺じいさんは呑気のんきな声を出して謡うたいをうたつてる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽あきずに唸うなる爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒さわぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのももつたいたいと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任さ

せてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う見だろう。太宰権帥でさえ博多近辺で落ちついたものだ。河合又五郎だつて相良でとまつてるじゃないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ気が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ立つて頼

むと云うと、また例の弟が取次に出て来た。おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があれば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩き起おこきしないとは限らない。教頭の所へご機嫌伺きげんうかがいにくるようなおれと見損みそくつてるか。これでも月給が入らないから返しに來きたんだ。すると弟が今來客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥おくへ引き

込んだ。足元を見ると、^{たたみつ}畳付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄^{こまげた}がある。奥でもう万歳^{ばんざい}ですよと云う声が聞える^{きこ}。お客とは野だだなと気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄^はを穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じゃない吉川君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯^{いっぱい}飲んでると見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが変ったから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺め^{なが}たが、とつさの場合返事をしかねて茫然^{ぼうぜん}としている。増給を断

わる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審に思つたのか、断わるにしても、今帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそうなものだ、と、呆れ返つたのか、または双方合併したのか、妙な口をして突つ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんかから聞いたのを

今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違ふでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしつかえないでしょうか」

おれはちよつと困つた。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねちお押し寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそつかしくて駄目だめだ駄目だと云われたが、なるほど少々そそつかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳くわしい事情は聞いてみなかったのだ。だから

こう文学士流に斬^きり付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心の中^{うち}で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけちん坊^{ぼう}の欲張り屋に相違ないが、嘘は吐^つかない女だ、赤シャツのよ^うに裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給^{めんこうむ}はご免蒙^{めんこうむ}ります」

「それはますます可笑^{おか}しい。今君がわざわざお出^{いで}になつたのは増俸を受けるには忍^{しの}びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりますよ」

「そんなに否^{いや}なら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間

のうちに、特別の理由もないのに豹変^{ひょうへん}しちや、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲^{ゆず}つて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削^{けず}つて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余^{じようよ}を君に廻^まわすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進される。新任者は最初^{つじう}からの約束^{やくそく}で安くくる。それで君が上がりければ、これほど都合

のいい事はないと思うですがね。いやなら否いやでもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧妙こうみょうな弁舌ぶんぜつを揮ふるえば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違おそつてたと恐れ入おそって引きさがるのだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好なかつた。途中とちゅうで親切な女みたような男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じやよつぽど厭いやになつてゐる。だから先がどれほどうまく論理的に弁論たぐましを逞たくまくしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中

まで惚^ほれさせる訳には行かない。金や威力^{いりよく}や理屈^{りくつ}で人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査^{じゅんさ}でも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかつている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐^{やまあらし}

が突然、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼んだから、真面目に受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪るい奴で、よく偽筆へ贗落款などを押して売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目に違いない。君に懸物や骨董を売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わないで儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大変失敬した勘弁したまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘をとつて、おれの蝦蟇口のなかへ入れた。山嵐は君それを引き込めるのかと不審そうに聞くから、うんおれは君に奢られるのが、いやだつたから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考

えてみると、やつぱり奢ってもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙みょうだからそのままにしておいた。近來は學校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだつたと云つたら、君はよつぽど負け惜おしみの強い男だと云うから、君はよつぽど剛情張じやうじやうりだと答えてやつた。それから二人の間にこんな問答が起おこつた。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸えどっ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津あいづだ」

「会津っぽか、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜^{はま}まで見送りに行こうと思つてゐるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴^{さかな}を食つたら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿^{ばか}だ」

「君はすぐ喧嘩^{けんか}を吹き懸^ふける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳^{けいちよう}な風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話^{はな}しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄った。おれはこの間から、うらなり君の顔を見る度に気の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行つてやりたい様な気がしだした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒肝を挫いでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭としてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知つている。おれが野芹川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎だと云つたら、山嵐は君はだれを捕まえても馬鹿呼わりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つたじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃ

ない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは臍^ふ抜けの呆助^{ほうすけ}だと云つたら、そうかもしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙^{はる}かに字を知っていない。会津つばなんてものはみんな、こんな、ものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕^{めんしよく}を免職する考えだたと云つた。免職するつもりだつて、君は免職になる気かと聞いたたら、誰^{だれ}がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいつしよに免職させてやると大いに威張^{いば}つた。どうしていつしよに免職させる気かと押し返して尋ね^{たず}たら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧^{ちえ}はあまりなさそうだ。おれが増給^{こと}を断わつたと話したら、大将大きに喜ん

ですが江戸っ子だ、えらいと賞^ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭^{いや}がつているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既^{すで}にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃^にげればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席^{そくせき}に許諾^{きょだく}したものだから、あとからお母^{つか}さんが泣きついても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人^{おとな}しい顔をして、悪事を働いて、人が何

か云うと、ちゃんと逃道にげみちを拵こしらえて待つてゐるんだから、よつぽど
奸物かんぶつだ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁てつけんせいさいでなくつちや利かない
と、瘤こぶだらけの腕うでをまくつてみせた。おれはついでだから、君
の腕は強そうだな柔術じゆうじゆつでもやるかと聞いてみた。すると大将二
の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攪つかんでみると云うから、指の先
で揉もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。
おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツ
の五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたたら、無論
さと云いながら、曲げた腕を伸のばしたり、縮ましたりすると、力
瘤がぐるりぐると皮のなかで廻転かいてんする。すこぶる愉快ゆかいだ。山
嵐の証明する所によると、かんじんよ縋りを二本より合せて、こ
の力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと
切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つ

たら、出来るものか、出来るならやつてみると来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲なぐつてやらないかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に氣の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくっちゃ、こつちの落度になるからと、分別のありそうな事を附加つけたした。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲りゆういんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、

妙な病気だな、じゃ君は人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。

会場は花晨亭かしんていといって、当地ここで第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷やしきを買入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳めいかしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんぼおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大概たいがい揃そろつて、五十畳じゅうの広間

に二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳だけに床とこは素敵に大

きい。おれが山城屋で占領せんりようした十五畳敷の床とは比較にならな

い。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある

瀬戸物の瓶かめを据すえて、その中に松まつの大きな枝えだが挿さしてある。松

の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、銭が懸らなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里ですと云った。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云つたら、博物はえへへへと笑っていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だから、陶器とうきの事を瀬戸物というのかと思つていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔くらいな大きな字が二十八字かいてある。どうも下手へたなものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々れいれいと懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つてゐる。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて
寄りかかるのに都合のいい所へ坐すわつた。海屋の懸物の前に狸たぬきが
はおりはかま、袴はかまで着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取じんどつ
た。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服
で控ひかえている。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈きゆうくつだつた
から、すぐ胡坐あぐらをかいた。隣となりの体操教師は黒ずぼんで、ちや
んとかしこまっている。体操の教師だけにいやに修行が積んで
いる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ならぶ。幹事が立つて、一言開いちごん
会の辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起たつ。ことごとく
送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君
の、良教師で好人物な事を吹聴ふいちようして、今回去られるのはまことに
残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜し
むところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望に

なつたのだから致し^{いた}方がないという意味を述べた。こんな嘘^{うそ}について送別会を開いて、それでちつとも恥^{はず}かしいとも思っていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸である^とまで云つた。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極^{きま}つてゐる。マドンナも大方この手で引掛^{ひっか}けたんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側^{むかいがわ}に坐つていた山嵐がおれの顔を見てちよつと稲光^{いなびかり}をさした。おれは返電として、人指し指でべっかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がったから、おれは嬉^{うれ}しかったので、思わず手をぱちぱちと拍^うつ

た。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困った。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠へきえんの地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞くとところによれば風俗のすこぶる淳朴じゅんぽくな所で、職員生徒ことごとく上代樸直じょうだいぼくちよくの氣風を帯びているそうである。心にもないお世辞ふを振り蒔まいたり、美しい顔をして君子おとしいを陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚とつこうの士は必ずその地方一般の歡迎かんげいを受けられるに相違そういない。吾輩わがはいは大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任ふにんされたら、その地の淑女しゆくじよにして、君子の好逑こうきゆうとなるべき資格あるものを扨えらんで一日も早く円満なる家庭をかた

ち作つて、かの不貞無節なるお転婆てんぱを事実の上において慚死ざんしせしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳せき払ばらいをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみんながおれの面かおを見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席から、座敷の端はしの末座まで行つて、慇懃いんぎんに一同に挨拶あいさつをした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大せいだいなる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘かんめいの至りに堪たえぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴ちやうだいして、大いに難有ありがたく服膺ふくようする訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧あいこのほどを願います。とへえつく張つて席もどに戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、

ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教頭に恭しくお礼を云っている。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心から感謝しているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目に謹聴しているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁を飲んでみたがまずいものだ。口取に蒲鉾はついてるが、どす黒くて竹輪の出来損ないである。刺身も並んでるが、厚くつて鮪の切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣り近所の連中はむしやむしや旨そうに食っている。大方江戸前の料理を食った事がないんだろう。そのうち爛徳利が頻繁に往来し始めたら、四方が急に賑やか

になった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃さかずきを頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬けんしゅうをして、一巡周いちじゅんめぐるつもりとみえる。はなはだご苦勞である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましょうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンのままかしこまって、一盃差はいし上げた。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立しゅつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましょうと云つたら、うらなり君はいえご用多おおのところ決してそれには及びおよませんと答えた。うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送る氣でいる。

それから一時間ほどするうちに席上はぱい大分乱れて来る。まあ一杯、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律ろれつの巡りまわかねるのもひとりふたり

一人二人出来て来た。少々退屈たいくつしたから便所へ行つて、昔風な

庭を星明りにすかして眺^{なが}めていると山嵐が来た。どうださつきの演説はうまかつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議^{こうぎ}を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡^おに居らないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被^{ねこつかぶ}りの、香具^や師^しの、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大變たくさん知ってる。それで演舌えんぜつが出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩けんかのときに使おうと思つて、用心のために取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」
「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側えんがわをどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳かけ出して来た。

「両君そりやひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃にがさない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの兩人共便所に来たのだが、酔よつてるもんだから、便所へはいるのを忘れて、

おれ等を引つ張るのだろう。酔つ払いは目の中^{あた}る所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだらう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際^{かべぎわ}へ押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分^{きり}を奇麗^{きれい}に食い尽^{つく}して、五六間先^{えんせい}へ遠征に出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？ と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚^{おど}ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱^{とこばしら}へもたれて例の琥珀^{こはく}のパイプを自慢^{じまん}そうに啣^{くわ}えていた、赤シャツが急に起^たつて、座敷を

出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸けて歸つたんだろう。

芸者が来たら座敷中急に陽氣になつて、一同が鬨の声を揚げて歓迎したのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古のようだ。こつちでは拳を打つてゐる。よつ、はつ、と夢中で両手を振るところは、ダーク一座の操人形よりよつぽど上手だ。向うの隅ではおいお酌だ、と徳利を振つてみて、酒だ酒だと言ひ直してゐる。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰に下を向いて考え込んでるのはうらなり君ばかり

である。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜おしんでくれるんじゃない。みんなが酒を呑のんで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてももらわない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめいどうまじえ胴間声を出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云つたら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちきりん。叩いて廻あつて逢われるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりと叩いて廻あつて逢いたい人がある、と二た息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。すると、いつの間にか傍そばへ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢い

たい人に逢つたと思つたら、すぐお歸りで、お氣の毒さまみた
ようでげすと相変らず嘸し家みたような言葉使いをする。知り
まへんと芸者はつんと済ました。野だは頓着なく、たまたま逢
いは逢いながら……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる。
おきなはれやと芸者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦し
て笑つてる。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩
かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊
の国を踊るから、一つ弾いて頂戴と云い出した。野だはこの上
まだ踊る氣でいる。

向うの方で漢学のお爺さんが齒のない口を歪めて、そりや聞
えません伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……とまでは無
事に済したが、それから？ と芸者に聞いている。爺さんなん
て物覚えのわるいものだ。一人が博物を捕まえて近頃こないな

のが、でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——花月巻かげつまき、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可はんかの英語でぺらぺらと、I am glad to see you と唄うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持って来て、踏破ふみやぶる千山万岳せんざんばんがくのけむり烟まんなかと真中へ出て独りで隠かくし芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊きいの国を済まして、かつぱれを済まして、棚たなの達磨だるまさんを済して丸裸まるはだかの越中えっちゅうふんどし禪ぜん一つになって、棕櫚しゅろぼうぎ箒しを小脇こわきに抱い込んで、日清談判破裂はれつして……と座敷中練りあるき出した。まるで気違きちがいだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱^ぬがず控えているうらなり
君が気の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だつて、
越中禪の裸踊^{はだかおどり}まで羽織袴で我慢^{がまん}してきている必要はあるまいと
思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう帰りましようと思つて退去
を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、
私が先へ歸つては失礼です、どうぞ遠慮^{えんりょ}なくと動く景色もな
い。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするが
いいです、あの様をご覧なさい。氣狂^{きちがい}会です。さあ行きましよう
と、進まないのを無理に勧めて、座敷を出かかるところへ、野だ
が箒を振り振り進行して来て、やぶ主人が先へ歸るとはひどい。
日清談判だ。歸せないで箒を横にして行く手を塞^{ふさ}いだ。おれは
さつきから肝癪^{かんしゃく}が起つているところだから、日清談判なら貴様
はちゃんちゃんだろうと、いきなり拳骨^{げんこつ}で、野だの頭をぽかり

と喰^くわしてやった。野だは二三秒の間毒氣を抜^はかれた体^{てい}で、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲^ぶちになったのは情ない。この吉川を^{ちようちやく}ご打擲^{うちてき}とは恐れ入った。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐^{さんらん}が何か騒動^{そうどう}が始まったと見てとつて、劍舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋^{くびすじ}をうんと攪^{つか}んで引き戻^{もど}した。日清……いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横^{ねじ}に振^ねつたら、すたと倒^{たお}れた。あとはどうなつたか知らない。途中^{とちゆう}でうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過ぎだった。

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんぺいばで式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員ひとりの一人としていっしょにくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まばしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍たいぎを整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込む仕掛けしかけである。仕掛しかけだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくつては生徒の体面にかかわると思つてゐる奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに鬨ときの声を揚げたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も鬨ときの声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてゐる。

喋舌らないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云いつたつて聞きつこない。喋舌るのもただ喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあこれならよからうと思つていた。ところが実際は大違おおちがいである。下宿の婆ばあさんの言葉を借りて云えば、正に大違かんごろういの勘五郎である。生徒があやまつたのは心しんから後悔こうかいしてあやまつたのではない。ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡ずるい事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけにするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまつたり詫わびたりするのを、真面目まじめに受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿ばかと云うんだらう。あやまるのも

仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、団子だのと云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰が云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんじやありません、団子と申したのじやありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんぐらい云うに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛つておく、

ちよばい
檮蒲一はない。

向こうが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供

だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰けいばつとして何か返

報をしてやらなくつては義理がわるい。ところがこつちから返

報をする時分に尋常じんじょうの手段で行くと、向うから逆振さかねじを食わして

来る。貴様がわるいからだと言つと、初手から逃げ路みちが作つて

ある事だから滔々とうとうと弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方

を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非を攻撃こうげきする。もと

もと返報にした事だから、こちらの弁護は向うの非が拳がらな

い上は弁護にならない。つまりは向うから手を出しておいて、

世間体はこつちが仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みなされてしまう。

大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子ぐうたらどうじを極

め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云え

ば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも

向うの筆法を用いて捕ま^{つら}えられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸^{えど}っ子も駄目^{だめ}だ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目で何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ歸つて清^{きよ}といつしよになるに限る。こんな田舎^{いなか}に居るのは墮落^{だらく}しに來ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附^ついてくると、何だか先鋒^{せんぽう}が急にがやがや騒^{さわ}ぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町^{おおてまち}を突き当^つつて薬師町^{やくしまち}へ曲がる角の所で、行き詰^{づま}ったぎり、押^おし返したり、押し返されたりして揉^もみ合っている。前方から静かに静かにと声を洩^からして來た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範^{しはん}学校

が衝突しょうとつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそ
うだ。なぜだかわからないが、まるで氣風が合わない。何かあ
ると喧嘩けんかをする。大方狭いせま田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕
事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、
面白半分に馳かけ出して行つた。すると前の方にいる連中は、し
きりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなつてる。後ろから
は押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔じゃまになる生徒の間をく
ぐり抜けて、曲がり角へもう少して出ようとした時に、前へ！
と云う高く鋭いすどど号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅肅しゆくしゆくと
して行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違そうい
ないが、つまり中学校が一步を譲ゆずつたのである。資格から云う
と師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳ばんざいを唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ帰つて、こないだじゅうから、氣に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつと詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく念入ねんいりに認めしめたなくつちやならない。しかしいざとなつて、半切はんきりを取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭めんどうくさい。これにしようか、これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清が面白がるようなものはないかしらん、と考へてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨すみを磨すつて、筆をしめして、巻紙まきしを睨にらめて、——巻紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨つて——同じ所作を同じよ

うに何返も繰り返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦めて硯の蓋をしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やっぱり東京まで出掛けて行つて、逢つて話をするのが簡便だ。清の心配は察しなくてもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと転がつて肱枕をして庭の方を眺めてみたが、やっぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心は清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮してると思つてゐるだろう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪ほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の

蜜柑みかんがあつて、塀へいのそとから、目標めじるしになるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生なつているところはすこぶる珍めずらしいものだ。あの青い実がだんだん熟きれてきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗きれいだろう。今でももう半分色の変つたのがある。婆ばあさんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨うまい蜜柑だそうだ。今に熟うたら、たとと召めし上がれと云つたから、毎日少しずつ食つてやろう。もう三週間もしたら、充分じゅうぶん食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然山嵐ぐうぜんやまあらしが話しにやつて来た。今日は祝勝会だから、君といつしよにご馳走ちそうを食おうと思つて牛肉を買つて来たと、竹の皮の包つつみを袂たもとから引きずり出して、座敷ざしきの真中まんなかへ抛り出した。おれは下宿で芋責豆腐責いもぜめになつ

てる上、蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかかった。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染のある事を知ってるかと聞くから、知ってるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云ったら、そうだ僕はこの頃ようやく勘づいたのに、君はなかなか敏捷だといにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娛樂だのと云う癖に、裏へ廻つて、芸者と関係なんかつけとる、怪しからん奴だ。それもほかの人が遊ぶのを寛容するならいいが、君が蕎麦屋へ行ったり、団子屋へはいるのさえ取締上害になると云つて、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様は。^{ざま} 馴染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化^{ごまか}す気だから気に食わない。そうして人が攻撃^{こうげき}すると、僕は知らないとか、露西亞^{ロシア}文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云つて、人を烟^{けむ}に捲^まくつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島のかげ、ま、かもしれない」

「湯島のかげ、また何だ」

「何でも男らしくないもんだろう。——君そのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫^{さなだむし}が湧^わくぜ」

「そうか、大抵^{たいてい}大丈夫^{だいじょうぶ}だろう。それで赤シャツは人に隠^{かく}れて、

温泉ゆの町の角屋かどやへ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むところを見届けておいて面詰めんぎつするんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に枡屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しょうじへ穴をあけて、見ているのさ」

「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくつちや」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事

がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのま
まにしておく、日本のためにならないから、僕が天に代つて
誅戮ちゅうりくを加えるんだ」

「愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今
夜から夜番をやるのかい」

「まだ枡屋かけあに懸合かけあつてないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、
加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略はくは下手はかりごとだが、喧嘩へたと
くるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略はかりごとを相談していると、

宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生にお目にかかりたいててお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじやが、お留守じやけれ、大方ここじやろうてて捜し当ててお出でたのじやがなもしと、鬨の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つてゐる。山嵐はそうですかと玄関まで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘いに来たんだ。今日は高知から、何とか踊りをしに、わざわざここまで多人数乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊だというんだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京でたくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町内へ廻ってくるんだから汐酌みでも何でもちゃんと心得ている。土佐つぽの馬鹿踊なんか、見たくもないと思つたけれども、せつかく山

嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘いに來たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が來たもんだ。

会場へはいると、回向院の相撲か本門寺の御会式のように幾旒となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて來たくらい、縄から縄、綱から綱へ渡しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀の囲いをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、背虫の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中か

ら風船が出た。帝国万歳ていこくばんざいとかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして、黒い団子だんしが、しよつと秋の空を射抜くいぬように揚がるあと、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟けむりが傘の骨かさのように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉の町ゆから、相生村あいおいむらの方へ飛んでいった。大方観音様の境内けいだいへでも落ちたろう。

式の時はずいぶんでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかとおどろいたぐらいうじやうじやしている。利口りこうな顔はあまり見当らないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、

これは大間違いであつた。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴たつつけばかまを穿いた男が十人ばかり

りずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく拔

き身を携さげているには魂消たまげた。前列と後列の間はわずか一尺五

寸ぐらいだろう、左右の間隔かんかくはそれより短いとも長くはない。

たつた一人列を離はなれて舞台の端はしに立つてゐるのがあるばかりだ。

この仲間外はずれの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約して、

抜身の代りに、胸たいこへ太鼓を懸かけている。太鼓は太神樂だいかぐらの太鼓と

同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気のんきな声を出し

て、妙な謡うたをうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩たたく。

歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳みかわまんざいと普陀洛ふだらくやの

合併がつぺいしたものと思えば大した間違ひにはならない。

歌はすこぶる悠長ゆうちやうなもので、夏分の水飴みずあめのように、だらしが

ないが、句切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのようにでも拍子ひょうしは取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速じんそくなお手際で、拝見ひやひやしていても冷々する。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り舞まわすのだから、よほど調子が揃そろわなければ、同志撃どうしうちを始めけがて怪我をする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険あぶなくもないが、三十人が一度に足踏みあしふみをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過おそぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲はんいは一尺五寸角の柱のうにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同

速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもって汐酌しおくみや関せきの戸との及およぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそうだと。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだと。三十人の足の運びも、手の働きも、腰こしの曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだと。傍はたで見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたつてるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわっと云う関の声がして、今まで穏おだやかに諸所を縦覧していた連中が、にわかに波を打って、右左りに揺うごき始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人

の袖そでを潜くぐり抜ぬけて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝けさの意趣返いしゅがえしをするんで、また師範しはんの奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜もぐり込こんでどつかへ行つてしまった。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすれ
ばいいのにと逃げる人を避よけながら一散に馳かけ出した。見てい
る訳にも行かないから取り鎮しずめるつもりだろう。おれは無論の
事逃げる気はない。山嵐の踵かかとを踏んであとからすぐ現場へ馳け
つけた。喧嘩は今が真最中まっさいちゆうである。師範の方は五六十人もあろ
うか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、
中学は式後大抵たいていは日本服に着換きかえているから、敵味方はすぐわ
かる。しかし入り乱れて組んづ、解ほれつ戦げつてるから、どこか
ら、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困った

なと云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方がない。巡査じゆんさがくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩はげの烈しそうな所へ躍り込おどんだ。止よせ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫ぬけようとしたが、なかなかそう旨うまくは行かない。一二間はいったら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較ひかくてき的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩かたを持って、無理に引き分けようとする途端とたんにだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握にぎつた、肩を放して、横に倒たおれた。堅かたい靴くつでおれの背中の上へ乗つた奴がある。両手と膝を突いて下から、跳はね起きた

ら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がって見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云って見たが聞えないのか返事もしない。

ひゅうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨ほおぼねへ中あたつたなと思つたら、後ろからも、背中を棒ぼうでどやした奴がある。教師の癖くせに出ている、打ぶて打ぶてと云う声がある。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛なげろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍そばに居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈ぶがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなったか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいったんだが、どやされたり、石をなげ

られたりして、恐れ入^{おそ}つて引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思^なうんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声^{くずね}がした。今まで葛練りの中で泳いでるように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思^{たいきやく}つたら、敵も味方も一度に引上げてしまつた。田舎者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかを見ると、紋付^{もんつき}の一重羽織^{ひとえばおり}をずたずたにして、向うの方で鼻を拭^ふいている。鼻柱をなぐられて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がつて真赤^{まっか}になつてすこぶる見苦しい。おれは飛白^{かすり}の袷^{あわせ}を着ていたから泥^{どろ}だらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどな損害はない。しかし頬^{ほっ}ぺたがぴりぴりし

てたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕ま^つつたのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名^{せいめい}を告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末^{てんまつ}を述べて下宿へ帰つた。

十一

あくる日眼^めが覚めてみると、身体中痛^{からだじゆう}くてたまらない。久しく喧嘩^{けんか}をしつけなかつたから、こんなに答えるんだろう。これじゃあんまり自慢^{じまん}もできないと床^{とこ}の中で考えていると、婆^{ばあ}さんが四国新聞を持^もつてきて枕元^{まくらもと}へ置いてくれた。実は新聞を見る

のも退儀たいぎなんだが、男がこれしきの事に閉口へこたれて仕様があるものかと無理に腹這はらばいになって、寝ねながら、二頁を開けてみると驚おどろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任ふにんした生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚しそうしてこの騒動そうどうを喚起かんきせるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記ふきしてある。本県の中学は昔時せきじより善良温順の気風をもつて全国の羨望せんぼうするところなりしが、輕薄けいはくなる二豎子じゆしのために吾校の特権を毀損きそんせられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然ふんぜんとして起たつてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢ぶらいかんの上に加えて、彼等かれらをして再び教育界に足を入るる

余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸きゅうを据すえたつもりでいる。おれは床の中で、糞くそでも喰くらえと云いいながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体ふしぶしの関節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛なげつけたが、それでもまだ氣に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行つて棄すてて來た。新聞なんて無暗むやみな嘘うそを吐つくもんだ。世の中に何が一番法螺ほらを吹ふくと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向むこうで並ならべていやがる。それに近頃東京から赴任した生意氣な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみる。これでもれつきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図が見たけりや、多田満仲ただのまんじゅう以来の先祖を一人残らず拝ひたりまして

やらあ。——顔を洗ったら、頬ほっぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云ったら、けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾つて来いと云ったら、驚おどろいて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟易へきえきして学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらつた顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐつた返報と心得たのか、いやに冷ひやかしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐なめていろと云つてやつた。

するとこりや恐入^{おそれい}りやした。しかしさぞお痛い事でげしようと言^いうから、痛かろうが、痛くなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴^{どな}りつけてやったら、向^{むこ}う側の自席へ着いて、やつぱりおれの顔を見て、隣^{とな}りの歴史の教師と何か内所話を^をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至^{いた}っては、紫^{むらさきいろ}色に膨張^{ぼううちよう}して、掘^ほったら中^{うち}から膿^{うみ}が出^でそうに見える。自惚^{うぬぼれ}のせいか、おれの顔よりよつぽど手ひどく遣^やられている。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近しい仲で、お負けにその机が部屋^{へや}の戸口から真正面にあるんだから運がわるい。妙な顔が二^{ふた}つ塊^{かた}まつている。ほかの奴は退屈^{たいくつ}にさえなるときつとこつちばかり見る。飛んだ事^{こと}でと口で云うが、心のうちではこの馬鹿^{ばか}がと思^{おも}つてるに相違^{そうい}ない。それでなければああいふ風^{ふう}に私語^{ひご}合^あつてはくすく

す笑う訳がない。教場へ出ると生徒は拍手をもつて迎えた。先生万歳ばんざいと云うものが二三人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点しょうてんとなつてゐるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍そばへ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手続きこにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘さそうに行つたから、こんな事が起おこつたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはあくまで尽力じんりよくするつもりだから、どうかあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困つた事を新聞がかき出ししましたね。むずかしくならなければいいがと多少心配そうに見える。おれには心配なんかない、先で免職めんしょくをするなら、免職され

る前に辞表を出してしまっただけだ。しかし自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思つたが、学校から取消の手續きはしたと云うから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計つて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みを抱いて、あんな記事をとさらに掲げたんだらうと論断した。赤シャツはおれ等の行為を弁解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分の過失であるかのごとく吹聴していた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、両君は実に災難だと云つた。帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いぜ、用心しないとやられ

るぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじやなからうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴なようだが、おれより智慧のある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘について、事実これこれだと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣^やられるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰っちまわあ。こんな下等な所に頼^{たの}んだって居るのはいやだ」

「君が辞表を出したって、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣^{しやうこ}る事は、何でも証^{しやうこ}拠^この拳^{こぶし}がらないように、拳^{こぶし}が

らないようにと工夫するんだから、反駁^{はんぱく}するのはむずかしいね」

「厄^{やつかい}介^{かい}だな。それじゃ濡衣^{ぬれぎぬ}を着るんだね。面白^{おもしろ}くもない。天道^{てんどう}是^ぜ耶^や非^ひ

かだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それでいよいよとなつたら、温泉^{ゆづ}の町で取^おつて抑^{おさ}えるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手^{へた}なだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分れた^{わか}。赤シャツが果た^{はた}して山嵐の推察通りをやったのなら、実にひどい奴だ。到底^{とうてい}智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力^{わんりよく}でなくつちや駄目^{だめ}だ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰り^{つま}は腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披^{ひら}いてみると、正誤どころか取り消しも見えない。学校へ行つて狸^{たぬき}に催促^{さいそく}すると、あしたぐらい出すでしょうと云う。明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う

答だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロック張っているが存外無勢力なものだ。虚偽きよぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやまらせる事が出来ない。あんまり腹が立ったから、それじゃ私が一人で行って主筆に談判すると云ったら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説論せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打ぶつ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鰌すっぱんに食いつかれるとが似たり寄つたりだとは今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知つかまつ仕つた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐ふんぜんが憤然とやつて来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつも

りだと云うから、そうかそれじゃおれもやろうと、そくぎ即座に一味
徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよかろうと首
を傾かたむけた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云わ
れたかと尋たずねるから、いや云われない。君は？ と聴き返すと、
今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんか
ら処決しよけつしてくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓はらつづみを叩たたき過ぎて、胃の位置
が顛倒てんどうしたんだ。君とおれは、いつしよに、祝勝会へ出てき、
いつしよに高知のぴかぴか踊おどりを見てき、いつしよに喧嘩をと
めにはいつたんじゃないか。辞表を出せというなら公平に両方
へ出せと云うがいい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らない
んだろう。焦慮じれついな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸ゆきがか

り上到底^{とうてい}両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害に
ならないと思ってるんだ」

「おれだつて赤シャツと両立するものか。害にならないと思う
なんて生意氣だ」

「君はあまり單純過ぎるから、置いたつて、どうしても胡魔^{ごま}化さ
れると考へてるのさ」

「なお悪いや。誰^{だれ}が両立してやるものか」

「それに先だつて古賀が去つてから、まだ後任が事故のために
到着^{とうちやく}しないだろう。その上に君と僕を同時に追出しちや、生

徒の時間に明きが出来て、授業にさし支^{つか}えるからな」

「それじゃおれを間^{あい}のくさびに一席伺^{うかが}わせる気なんだな。こん
畜生^{ちくしょう}、だれがその手に乗るものか」

翌日おれは学校へ出て校長室へ入つて談判を始めた。あくるひ

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」つじう

「その都合が間違つてまさあ。まちが私が出さなくつて済むなら堀田

だつて、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られてもやむをえんですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きはら払つてる。おれは仕様がなから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、

私が安閑^{あんかん}として、留まっていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去つたら、学校の数学の授業がまるで出来なくなつてしまうから……」

「出来なくなつても私の知つた事じゃありません」

「君そう我儘^{わがまま}を云うものじゃない、少しは学校の事情も察してくれなくつちや困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴^{りれき}に關係するから、その辺も少しは考えたらいいでしよう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

「そりやごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやつても

らいたい。とにかく、うちでもう一返考え直してみて下さい」
考え直すつて、直しようのない明々白白たる理由だが、狸が蒼あおくなったり、赤くなったりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つつけるなら塊かためて、うんと遣つつける方がいい。
山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのままにしておいても差支さしつかえあるまいとの話だつたから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧りこうらしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶あいさつをして浜はまの港屋ますやまで下さがつたが、人に知れないように引き返して、温泉ゆの町の枡屋ますやの表二階へ潜ひそんで、障子しょうじへ穴をあけて覗のぞき出した。

これを知つてゐるものはおればかりだろう。赤シャツが忍しのんで来ればどうせ夜だ。しかも宵よいの口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極きまつてゐる。最初の二晩はおれも十一時頃ごろまで張番はりばんをしたが、赤シャツの影かげも見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏ふんで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿氣た事はない。四五日しごんちすると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥おくさんのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ちがう。こつちのは天に代つて誅戮ちゆうりくを加える夜遊びだ。とはいふものの一週間も通つて、少しも験げんが見えないと、いやになるもんだ。おれは性急せつかちな性分だから、熱心になると徹夜てつやでもして仕事をするが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。いかに天誅てんし党でも飽あきる事には変りはない。六日目には少々いやになつて、

七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固な
ものだ。宵よいから十二時過すぎまでは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼ
やの瓦斯燈がすとうの下を睨にらめつきりである。おれが行くと今日は何人
客があつて、泊とまりが何人、女が何人といろいろな統計を示すの
には驚ろいた。どうも来ないようじゃないかと云うと、うん、
たしかに来るはずだがと時々腕組うでぐみをして溜息ためいきをつく。可愛想に、
もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯しょうがい天
誅を加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、
それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぜめに
応ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の
赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懷手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段はしごだんを登つて
山嵐の座敷ざしきの障子をあげると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような

顔は急に活気を呈^{てい}した。昨夜^{ゆうべ}までは少し塞^{ふさ}ぎの気味で、はたで見ているおれさえ、陰^{いん}氣臭^{きくさ}いと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快^{ゆかい}と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴^{こすず}と云う芸者が角屋へはいつた」

「赤シャツといつしよか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてつて、ああ云う狡^{ずる}い奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帶の間からニツケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈らんぷを消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張いっかんばりの机の上にあつた置き洋燈らんぷをふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐いっしょうけんめいは一生懸命に障子へ面かおをつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだぜ」

「おれは錢のつづく限りやるんだ」

「錢つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十錢払った。いつ飛び出しても都合つごうのいいように毎晩勘定かんじようするんだ」

「それは手廻てまわしがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈きゆうくつでたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々疎てんもうかいさいそにして洩もらしちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小声になつたから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたいた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違つてゐる。おやおやと思つた。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打つた。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は大分静かになつた。遊廊ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞えるきこ。月が温泉ゆの山うしろの後からのつと顔を出した。往来はあかるい。すると、下しもの方から人声が聞えだした。窓から首を出

す訳には行かないから、姿を突き留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄こまげたを引き擦る音がする。眼を斜ななめにとするとやつと二人の影法師が見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追っ払ったから」正ただしく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がな」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだの坊ぼっちゃんだから愛嬌あいぎようがありますよ」「増給がいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちぶのめしてやろうと思ったが、やつとの事で辛防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいった。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜かしやがつた」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃ようげきしなければならない。しかし

二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼たのんで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵たいていなら泥棒どろぼうと間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るのをじっとして待つてゐるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙から睨^{すき}めてゐるのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくつて、これほど難儀^{なんぎ}な思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑えよう^{おさ}と発議^{ほつぎ}したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥^{しりぞ}けた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中で遮^{とちゆう}られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃^にげるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢^{がまん}した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを

尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉ゆの町をはずれると一丁ばかりの杉並木すぎなみきがあつて左右は田圃たんぼになる。それを通りこすところかしこに藁葺わらぶきがあつて、畠はたけの中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕つかまえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外はずれると急に馳かけ足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚おどろろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野達は狼狽ろうばいの気味で逃げ出そうという景色けしきだったから、おれが前へ廻つて行手を塞ふさいでしまった。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊とまつた」と山嵐はすぐ詰なりかけた。

「教頭は角屋へ泊わつて悪わるいという規則がありますか」と赤シャ

ツは依然^{いぜん}として鄭寧^{ていねい}な言葉を使つてゐる。顔の色は少々蒼い。

「取締上^{とりしまりじょう}不都合だから、蕎麦屋^{そばや}や団子屋^{だんごや}へさえはいつてはいか

んと、云うくらい謹直^{きんちよく}な人が、なぜ芸者といつしよに宿屋へと

まり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云つたんじやないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂^{たもと}を握つてゐる。追っかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云いながら、野だの面へ擲^たきつけた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつぽど仰天^{ぎょうてん}した者と見えて、わつと言いながら、尻持^{しりもち}をつい

て、助けてくれと云った。おれは食うために玉子は買ったが、打^ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝^{かん}癪^{しやく}のあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜^{ちく}生^{しょう}、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲^たきつけたら、野だは顔中黄色になつた。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊つたと云う証^{しょう}拠^きがありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいつたのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊つたのである。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨げんこつを食わした。赤シャツはよろよろしたが「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたばかりと撲なぐる。「貴様のうな奸物はなぐらなくっちゃ、答えないんだ」とぽかぽかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。しまいには二人とも杉の根方にうずくまって動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なぐつてやる」とぽかぽかんと兩人ふたりでなぐつたら「もうたくさんだ」と云った。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに

懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云ったら兩人共だまっていた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてゐるから警察へ訴えたければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めた。婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つ

たが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之辞職の上
もうしそろ東京へ帰り申候につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛
わたくしぎ
これあり
にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆しゅつぱんである。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう
寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来な
いかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えな
かつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄ふじような地を離はなれた。船が岸を去れば
去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ
着いた時は、ようやく娑婆しゃばへ出たような気がした。山嵐とはす
ぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

きよ清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿
かばんへも行かず、革鞆かばんを提げたまま、清や帰つたよと飛び込んだら、

あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙を^{なみだ}ぼたぼたと落した。おれもあまり嬉^{うれ}しかったから、もう田舎^{いなか}へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

その後ある人の周旋^{しゅうせん}で街鉄^{がいてつ}の技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関^{げんかん}付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎^{はいえん}に罹^{かか}つて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋^うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃん^{こびなた}の来るのを楽しみに待つておりますと云つた。だから清の墓は小日向^{こひなた}の養源寺にある。

(明治三十九年四月)

坊っちゃん

坊っちゃん

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成 4）年 1 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 10 月 27 日第 1 刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による 2 字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を 2 字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999 年 9 月 13 日公開

2004 年 2 月 27 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。